長崎県文化財調査報告書第136集

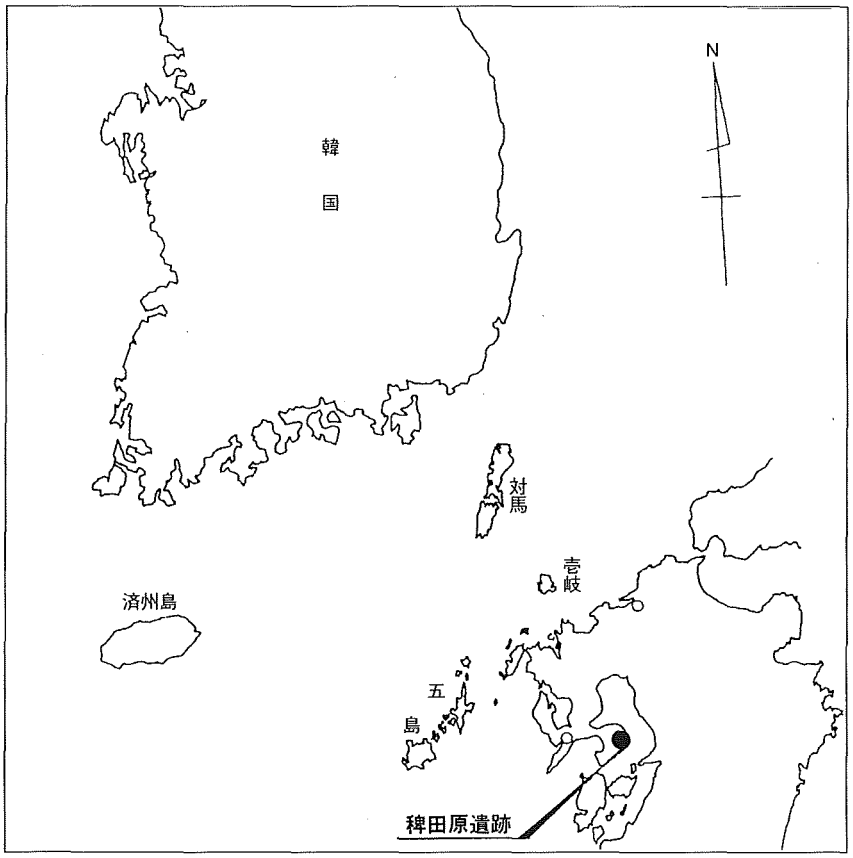
稗田原遺跡 I

1997年

長崎県教育委員会

長崎県文化財調査報告書第136集

稗田原遺跡 I



1997年

長崎県教育委員会

序　　文

稗田原遺跡は，島原市の北部，稗田町に分布し，近くには畑中遺跡，礫石原遺跡，長貫遺跡等の広大な縄文時代晩期の遺跡が分布しています。この地は，昭和30年代から40年代にかけて，地元の研究家古田正隆氏により調査され，初期農耕についての問題提起がなされた場所でもあります。その後何回かの発掘調査が行われながらも，いまだ古田氏が提起された初期農耕についての明確な回答はでていないというのが現状ではないでしょうか。

今回調査に至った経緯は，一般県道礫石原松尾停車場線の拡幅工事が計画され，試掘調査の結果，遺跡の範囲が判ったためであります。

長崎県教育委員会は，この遺跡の重要性を考え，島原振興局建設部道路課と協議を重ね，遺跡の所在が判った範囲で，発掘調査を実施したものです。

この調査報告書が本県の埋蔵文化財についての理解と愛護の精神を深め，学術，教育，文化財保護のために広く活用されることを念願するものであります。

発掘調査の実施にあたって御理解と御協力をいただきました地元の関係の皆様と，炎天下のもと，作業に従事して下さいました皆様に対し，衷心より感謝申し上げます。

平成９年３月

長崎県教育委員会教育長　中　川　　忠

例　　言

一．本書は，一般県道礫石原松尾停車場線拡幅に伴って実施した長崎県島原市稗田町に所在する稗田原遺跡の緊急発掘調査報告書である。

二．長崎県教育委員会が調査主体で，調査期間は次のとおりである。

試掘調査　平成４年６月22日～６月27日

１次調査　平成４年８月17日～９月３日

２次調査　平成５年10月28日～12月２日

３次調査　平成７年10月16日～11月２日

三．長崎県教育委員会文化課の調査関係者は以下のとおりである。

試掘調査　寺田正剛(文化財保護主事)，下田章吾(文化財調査員　現東彼杵町教育委員会)

１次調査　〃　〃　〃　〃

２次調査　村川逸朗（文化財保護主事)，寺田正剛（文化財保護主事　現小島中学校)

３次調査　福田一志（文化財保護主事)，松尾昭子（文化財調査員　現鷹島町教育委員会)

四．本書は分担執筆した。Ⅰ～Ⅲ１．２（１）（２）①～④を村川が，Ⅲ（２）⑤～⑧を古門雅高が，Ⅲ２（３）の３次調査分を福田が執筆した。

五．本書の編集は村川がおこなった。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の地理的歴史的環境……1

Ⅲ　調　　査……4

1．試掘調査……4

2．本 調 査……4

（1）　1次調査……4

①調査概要……4

②土　層……4

③遺　構……18

④遺　物……18

⑤所　見……18

（2）　2次調査……18

①調査概要……18

②土　層……18

③遺構・遺物……30

④所　見……30

⑤1号竪穴式住居跡（ＳＢ1）出土の古式土師器……36

⑥1号竪穴式住居跡（ＳＢ1）以外から出土した古式土師器……39

⑦稗田原遺跡住居跡出土の古式土師器について……42

⑧有明海西部地域の古式土師器……43

（3）3次調査……50

①調査概要……50

②土　層……50

③遺　構……51

④遺　物……54

⑤第3次調査のまとめ……57

Ⅳ　ま と め……58

挿図目次

第１図　稗田原遺跡位置図…… 3
第２図　試掘調査廣及び１～３次調査区域……５～６
第３図　１次調査区配置図……７～８
第４図　１次調査区遺構配置図……９～10
第５図　２次調査区配置図及び遺構検出状況……11～12
第６図　２次調査区遺構配置図①……13～14
第７図　２次調査区遺構配置図②……15～16
第８図　１号竪穴式住居跡（ＳＢ１）１／30…… 17
第９図　２次調査区土層図…… 19
第10図　出土土器①…… 20
第11図　出土土器②…… 21
第12図　出土土器③…… 22
第13図　出土土器④…… 23
第14図　出土石器①…… 24
第15図　出土石器②…… 25
第16図　出土石器③…… 26
第17図　出土石器④…… 27
第18図　出土石器⑤…… 28
第19図　出土石器⑥…… 29
第20図　出土石器⑦…… 30
第21図　古式土師器①（１号竪穴式住居跡出土　Ｓ＝１／３）…… 37
第22図　古式土師器②（Ｓ＝１／３）…… 39
第23図　古代・中世の土師器（Ｓ＝１／３）…… 40
第24図　古式土師器出土状況(1号竪穴式住居跡Ｓ＝1／60,土器Ｓ＝1／９)…… 41
第25図　今福遺跡出土土器(１)と西ノ角遺跡出土土器(２，３)(Ｓ＝１／４)… 43
第26図　平山遺跡Ｂ地点出土土器(1～5)と小野曽屋遺跡出土土器(6～15)(Ｓ＝1／6)… 44
第27図　黒丸遺跡出土土器(1～6)と上篠原遺跡出土土器(7～11)(Ｓ＝1／6) … 45
第28図　上田井原遺跡出土土器(1～4)(Ｓ＝1／8)と大堂遺跡出土土器(5～8)(Ｓ＝1／6) …… 46
第29図　３次調査地点土層図…… 52
第30図　３次調査区遺構図及び調査区全体図…… 53
第31図　３次調査地点出土の遺物…… 55
第32図　３次調査地点出土の石器…… 56

表 目 次

第１表　遺跡地名表…… 2
第２表　各区出土の土器①…… 31
第３表　各区出土の土器②…… 32
第４表　各区出土の石器①…… 33
第５表　各区出土の石器②…… 34
第６表　各区出土の石器③…… 35

図 版 目 次

図版１　試掘調査及び１次調査の状況…… 61
図版２　２次調査状況①…… 62
図版３　２次調査状況②…… 63
図版４　３次調査状況…… 64
図版５　出土土器①１／２…… 65
図版６　出土土器②１／２…… 66
図版７　出土土器③１／２…… 67
図版８　出土土器④１／２…… 68
図版９　出土古式土師器及び古代・中世の土師器…… 69
図版10　出土石器２／３…… 70

I　調査に至る経緯

一般県道礫石原松尾停車場線の改良工事が計画され，稗田原遺跡の中で拡幅工事が実施されるため試掘調査を実施した後，用地買収の進捗状況に合わせて本調査を実施した。平成２年度から６年度にかけて一次から三次調査を実施した。

II　遺跡の地理的歴史的環境

遺跡が所在する稗田町は，もとは島原市三会木崎名の一部で，島原半島の東部，雲仙山系北東麓の火山性扇状台地に位置し，東は有明海に面している。現在この海岸部には建設資材等の貨物輸送の急増に対して，昭和44年から貨物埠頭を建設し，島原新港と呼ばれている。

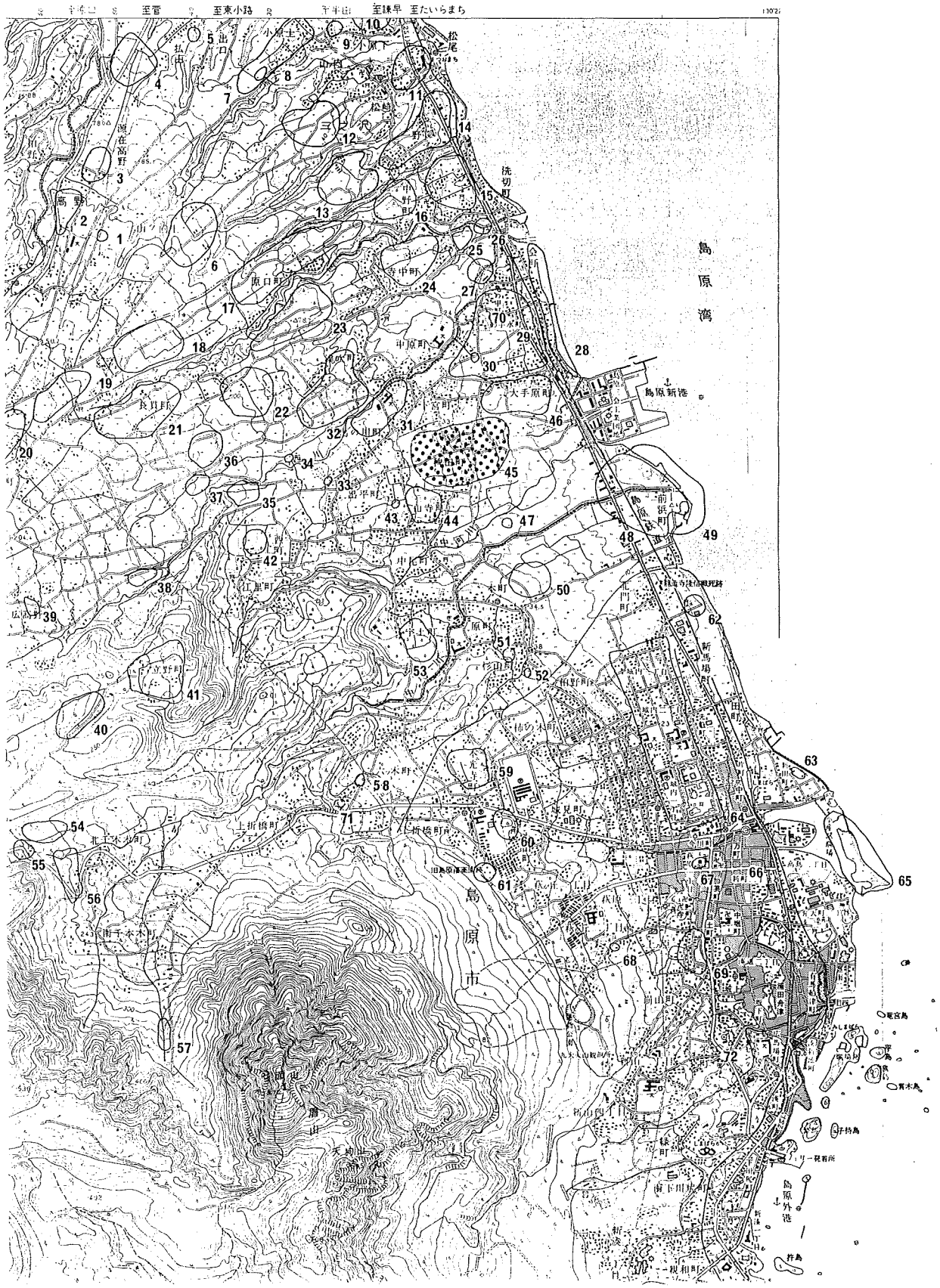
この三会原には，高燥域に所在する礫石原遺跡を始めとして，縄文時代晩期の遺跡が多い。海岸部に向かって標高が下がるにしたがい，上油堀，下油堀，長貫Ａ，長貫Ｂ，南楠沢，大塚後，津吹，三会中学校，寺中Ａ，寺中Ｂ，下宮，平成３年に調査された畑中遺跡，そして，本報の稗田原遺跡等がある。この三会原全体に縄文時代晩期の遺跡が，ほぼまんべんなく分布している。平成８年度の調査でわかったことであるが，稗田原遺跡では，この縄文時代晩期の包含層の下で縄文時代中期から後期にかけての時期の火砕流の堆積が確認された。この火砕流は，隣の畑中遺跡でも確認されており，恐らくは三会原全体に広がっていたと思われる。火砕流が堆積した後，表面が土壌化するか，火山灰の堆積があるかして，栽培，ないしは耕作するに足る土壌が醸成され，遺跡が形成されたものであろう。

弥生時代から古墳時代の遺跡として，山崎遺跡，沖田遺跡，沖田海中遺跡等がある。また，古墳時代の長塚古墳等も所在している。

三会原の北側，中野川と西川の河口部の沖積地上には，中野川遺跡と西川遺跡がある。これらの遺跡の北側の海岸段丘上には景華園遺跡があり，この沖積地上の２遺跡が景華園遺跡の生産基盤である可能性も考えられる。景華園遺跡は，弥生時代中期を主体とし，遺構としては甕棺，箱式石棺墓，支石墓（２基）等が確認されており，出土遺物は，銅鏡（？），銅剣，銅鉾，管玉等がある。県下の遺跡発見の記録としては最も古く，元禄１２年に当時の藩主松平忠房が大石を動かしたところ，下から銅剣２本が出土したと，島原藩主松平家の記録『深耕世紀』に記してある。次に昭和５年，甕棺墓地から狭鋒銅鉾２本，硬玉製勾玉１個，碧玉製管玉15個，布片１片が出土し，考古学雑誌第21巻８号に『甕棺内新出の玉類及布片等について』の題で島田貞彦によって報告された。昭和32年の大水害の折りには，甕棺墓とともに銅剣３本，玉類，貝輪，扁平片刃石斧，鉄製鋤先等が出土している。大石は支石墓であり，青銅器の出土もあるところからこの地域の中心的な遺跡であろう。

第１表　遺跡地名表

地図No	市町村No	名称	所在地	種別	立地	時代	備考
1	31—27	山ノ内上横穴古墳	有明町山ノ内上	古墳		古墳	
2	15	上源在高野遺跡	〃　大野名字上源在高野	遺物包含地	丘陵	縄文	
3	14	下源在高野遺跡	〃　〃　字下源在高野	〃	台地	〃	
4	13	上松高野遺跡	〃　〃　字上松高野	〃	〃	弥生	
5	31	拂山横穴古墳	〃　東古閑拂山	古墳	平地	古墳	
6	24	灰ノ久保遺跡	〃　三之沢名字灰ノ久保	遺物包含地	丘陵	縄文	
7	19	小原上遺跡	〃　〃　字小原	〃	〃	〃	
8	36	国土神社裏横穴	〃　大三東小原上	横穴	〃	古墳	
9	33	小原下B地点遺跡	〃　〃　小原下	遺物包含地	平地	縄文	
10	18	小原下遺跡	〃　三之沢名字和田・木下	〃	丘陵	〃	
11	20	松尾遺跡	〃　松崎名字松尾	〃	〃	古・奈	
12	21	山ノ内遺跡	〃　三之沢名字松崎上，上松崎	〃	〃	〃	
13	23	上一野遺跡	〃　〃　字上一野，下蓮輪	〃	〃	縄文	
14	22	一野遺跡	〃　〃　字野田，堂ノ前，下野，鼻ノ崎	〃	〃	弥・古	
15	3—1	景華園遺跡	島原市（三会）中野町高城元	墳墓	海岸段丘	弥生	
16	2	上中野遺跡	〃　（〃）上中野，野畑，久保	遺物包含地	台地	弥・古	
17	3	原口B遺跡	〃　原口町，屋敷高野，北長嶺	〃	丘陵	〃	
18	4	〃A遺跡	〃　（〃）尖石，原口上，堂の坂，葛龍沢，原口沢	〃	台地	縄・弥	
19	5	下油堀遺跡	〃　（〃）油堀町下油堀	〃	河岸段丘	〃	
20	6	上油堀遺跡	〃　（〃）　〃　上油堀（一部有明町にかかる）	〃	〃	縄文	
21	9	長貫A遺跡	〃　（〃）長貫町檜高野	遺物包含地	〃	先・縄	
22	10	〃B遺跡	〃　（〃）仁田平，津吹町上大高野	〃	台地	縄・弥	
23	11	寺中A遺跡	〃　（〃）寺中町大高野別れ道	〃	丘陵	弥生	
24	12	〃B遺跡	〃　（〃）尾崎，湯の元，内田	〃	平地	弥・古	
25	13	寺中城跡	〃　中野町城の鼻	城跡	丘陵	中世	
26	14	中野川遺跡	〃　（三会）中野町中野川川床	遺物包含地	川床	弥生	
27	15	西川遺跡	〃　（〃）亀の甲町	〃	平野	〃	
28	16	三会下町海中遺跡	〃　（〃）三会町（海中）	〃	海底	縄・弥	
29	17	畑中遺跡	〃　（〃）中原・亀の甲，御手水町	〃	平地	弥生	
30	60	大塚古墳	〃　（〃）中原町大塚	古墳	丘陵	古墳	
31	18	三会中学校遺跡	〃　（〃）下富，出の川町金万寺木崎	遺物包含地	台地	縄文	
32	19	津吹遺跡	〃　（〃）津吹町三段畑	〃	丘陵	縄・弥	
33	20	鬼の家古墳	〃　（〃）出の川町出の上	古墳	〃	古墳	
34	21	人塚古墳	〃　（〃）　〃　字人塚	〃	〃	〃	
35	22	大塚下遺跡	〃　（〃）　〃　〃	遺物包含地	台地	中世	
36	23	南楠沢遺跡	〃　（〃）南楠沢	〃	〃	弥生	
37	24	大塚後遺跡	〃　（〃）大塚後	〃	〃	縄文	
38	25	尻無遺跡	〃　（〃）広高野町尻無	〃	〃	〃	
39	26	大タブ沢遺跡	〃　（〃）　〃　大タブ沢	〃	〃	縄・中	
40	27	弓弦遺跡	〃　（杉谷）立野町弓弦	〃	丘陵	縄文	
41	28	立野遺跡	〃　（〃）　〃	〃	〃	〃	
42	29	坪浦遺跡	〃　（〃）西町坪浦	〃	台地	〃	
43	**30**	**まだれいな銘キリシタン碑**	**〃　（〃）山寺町867**	**キリシタン墓碑**	**〃**	**近世**	**県指定**
44	31	山崎遺跡	〃　（〃）山寺町字山崎	遺物包含地	〃	弥・古	
45	**32**	**稗田原遺跡**	**島原市（三会）稗田町**	**遺物包含地**	**平地**	**縄・弥・近**	
46	33	下宮遺跡	〃　（〃）下宮町園田，焼木	〃	平野	〃	
47	61	長塚古墳	〃　（杉谷）山寺町字長塚	古墳	平地	古墳	
48	42	沖田遺跡	〃　（〃）前浜町沖田	遺物包含地	平野	弥・古	
49	43	沖田海中遺跡	〃　（〃）　〃　〃	〃	海底	〃	
50	41	道田遺跡	〃　（杉谷）本町道田	墳墓	平地	弥生	
51	39	熊野神社遺跡	〃　（〃）原町熊野神社内	製鉄跡	平野	平・中	
52	40	熊野神社窯跡	〃　（〃）　〃	窯跡	〃	近世	
53	34	釘原遺跡	〃　（〃）宇土町釘原	遺物包含地丘陵	〃	弥・古	
54	35	平の山A遺跡	〃　（〃）北千本木町平の山	〃	〃	縄文	
55	36	肥賀太郎遺跡	〃　（〃）肥賀太郎　北千本木町	〃	〃	〃	
56	37	平の山B遺跡	〃　（〃）平の山　北千本木町	〃	〃	〃	
57	52	矢櫃遺跡	〃　（〃）南千本木町矢櫃	〃	〃	〃	
58	62	小塚古墳	〃　（〃）六ツ木町辰ノ元	古墳	〃	古墳	
59	38	丸尾城跡	〃　本光寺町本光寺内	城跡	〃	中世	
60	50	小山館跡	〃　小山町	館跡	〃	〃	
61	51	旧島原藩薬園跡	〃　〃　4701ほか	薬園跡	〃	近世	国指定
62	44	沖田畷遺跡	沖田畷新馬場町・北門町	遺物包含地（祭祀遺跡）	海岸段丘	古墳	
63	45	長浜台場跡	〃　新田町長浜	台場跡	平野	近世	
64	46	森岳城跡	〃　城内１丁目，２丁目	城跡	〃	〃	
65	47	大手浜遺跡	〃　新田町大手浜	遺物包含地	海岸	縄～古 平～近	
66	48	浜の城跡	〃　新町１丁目	城跡	平地	近世	
67	49	崇台寺のキリシタン墓碑	〃　萩原１丁目1224番地崇台寺	キリシタン墓碑	平野	〃	
68	63	笹塚古墳	〃　上の原３丁目，上の原２丁目，上の原１丁目	古墳	〃	古墳	
69	53	上の原遺跡	〃　白土町	遺物包含地	平地	弥生	
70	消滅	西川古墳	〃　（三会）亀の甲町	古墳	平野	古墳	
71	〃	折橋遺跡	〃　（杉谷）下折橋町	墳墓	丘陵	弥生	
72	〃	眉山焼窯跡	〃　八幡町	窯跡	〃	近世	



第１図　稗田原遺跡位置図

Ⅲ 調　　査

1．試掘調査

(1) 調　査

調査は，遺跡内の工事予定地（道路基準杭　OM．5～8）の買収済用地を手始めとして，平成4年6月22日～同年6月27日の6日間，範囲確認調査を実施した。工事予定区域内に2m×2mの試掘壙を12箇所設定し，東から順に着手した。

(2) 土　層

土層は基本的に4層に大別できる。1層は耕作土で厚さ20～70cm。2層は黒色砂質土で縄文時代晩期土器の遺物包含層である。厚さ10～30cm。3層は暗茶褐色土層。上層に僅かではあるが遺物を含む。4層は黄灰色砂層。遺物は含まない。TP2・3では黄褐色粘質土が確認される。

TP1～5までは，1層から2層にかけてトレンチャーの爪痕がのこるが，撹乱は受けていない。

(3) 遺　構

TP1・2・4で溝状遺構が確認された。性格は不明であるが，下部には砂が堆積している。

(4) 遺　物

遺物はすべての試掘壙から，縄文時代晩期から中世にかけての土器・陶磁器片と，縄文時代晩期の打製石斧・石皿・黒曜石がパンコンテナ1箱分出土している。

(5) まとめ

以上の結果から判断すると

① 縄文時代晩期の遺物を中心とする遺物包含層が確認された。

② 溝状遺構が確認され，住居跡等の遺構の存在も考えられる。

2．本　調　査

(1) 1次調査

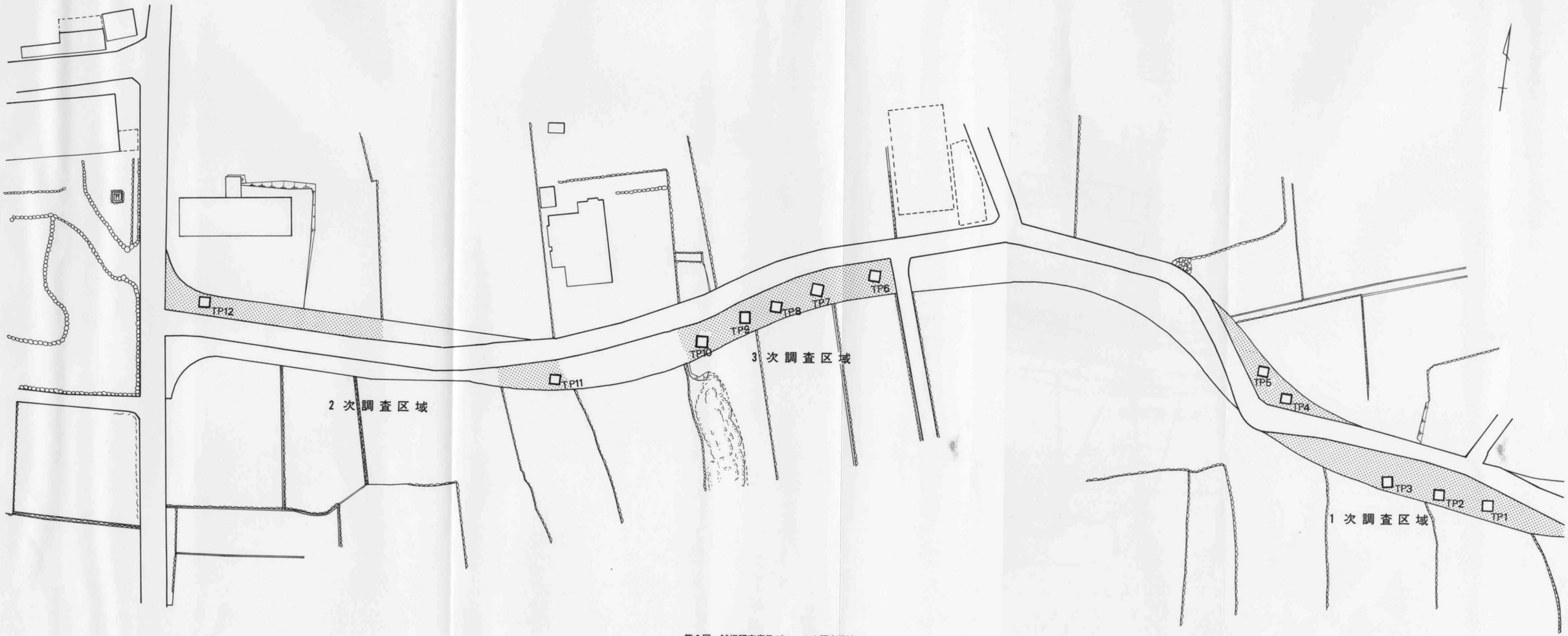
① 調査概要

今回の調査は，6月下旬に行った範囲確認調査の結果により実施したもので，平成4年度道路拡幅予定地の東部分（道路基準杭　OM5周辺），350m²に限って調査を行った。

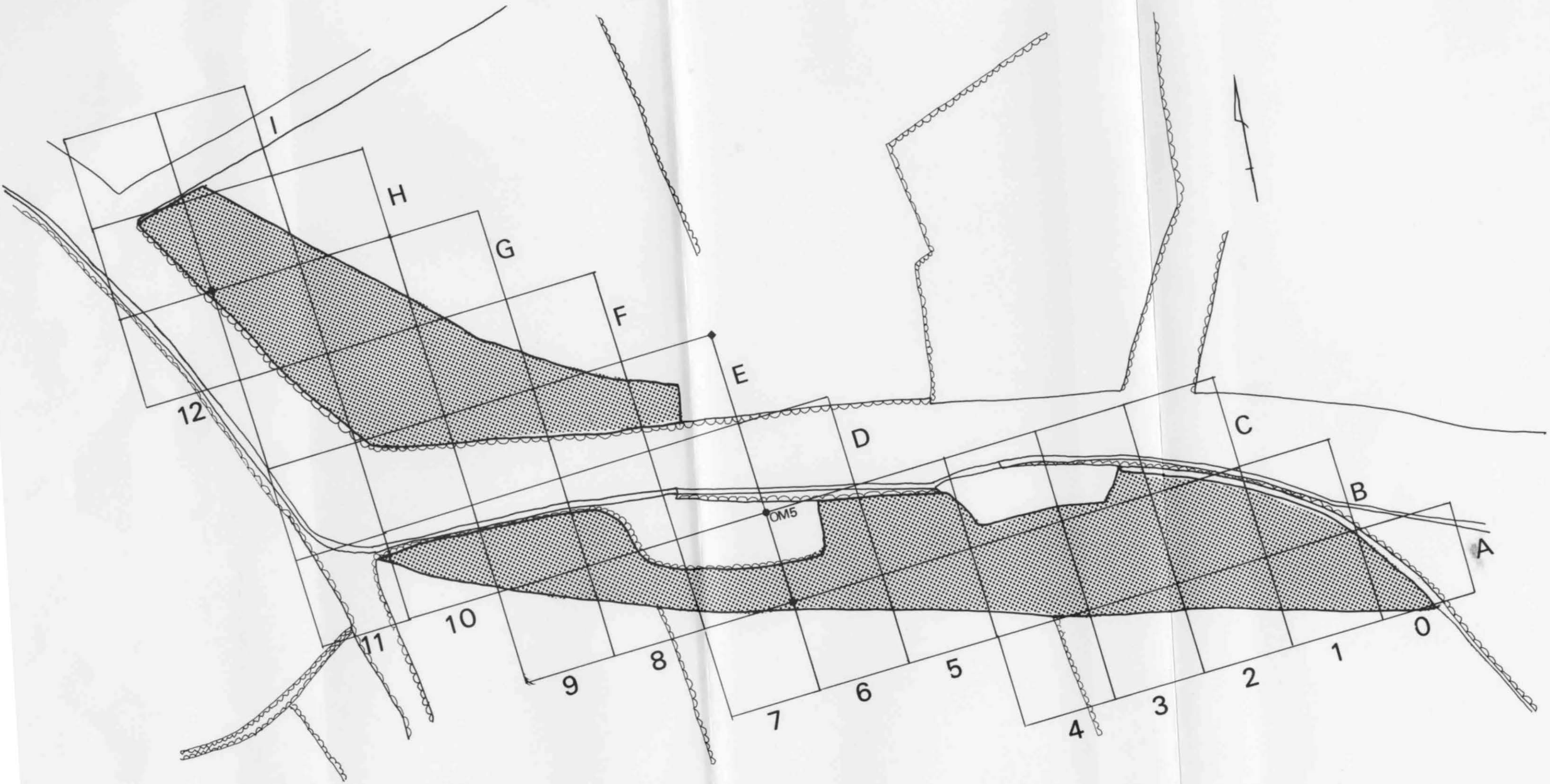
調査区は道路基準杭　OM5を起点とし，磁極方向に5m方眼のグリッドを設定し，調査区南東隅を起点として北にA・B…，西に1・2…と記号・番号を付けた。調査は，初日に表土の堆積が厚い南側調査区から重機による表土剝ぎを行った後，東から西に向けて掘り下げを行った。

② 土　層

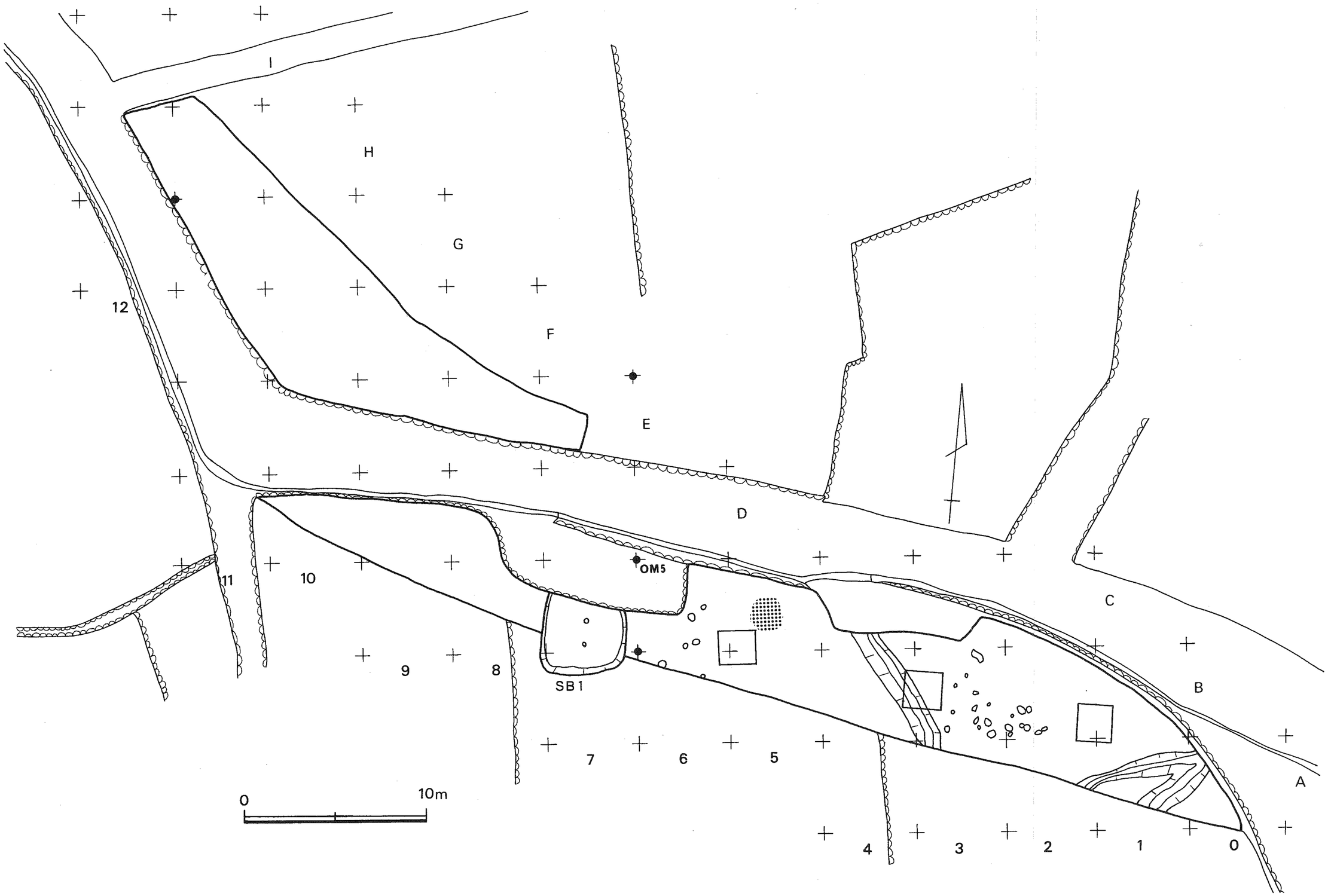
土層は，1層；表土層，1b層；混礫茶褐色硬質土層（整地層），2層；黒色砂質土層（古墳時代遺物包含層），3層；褐色砂質土層（縄文時代晩期包含層），3b層；青灰色砂層，4層；黄褐色粘質土層で，3b・4層は無遺物層である。



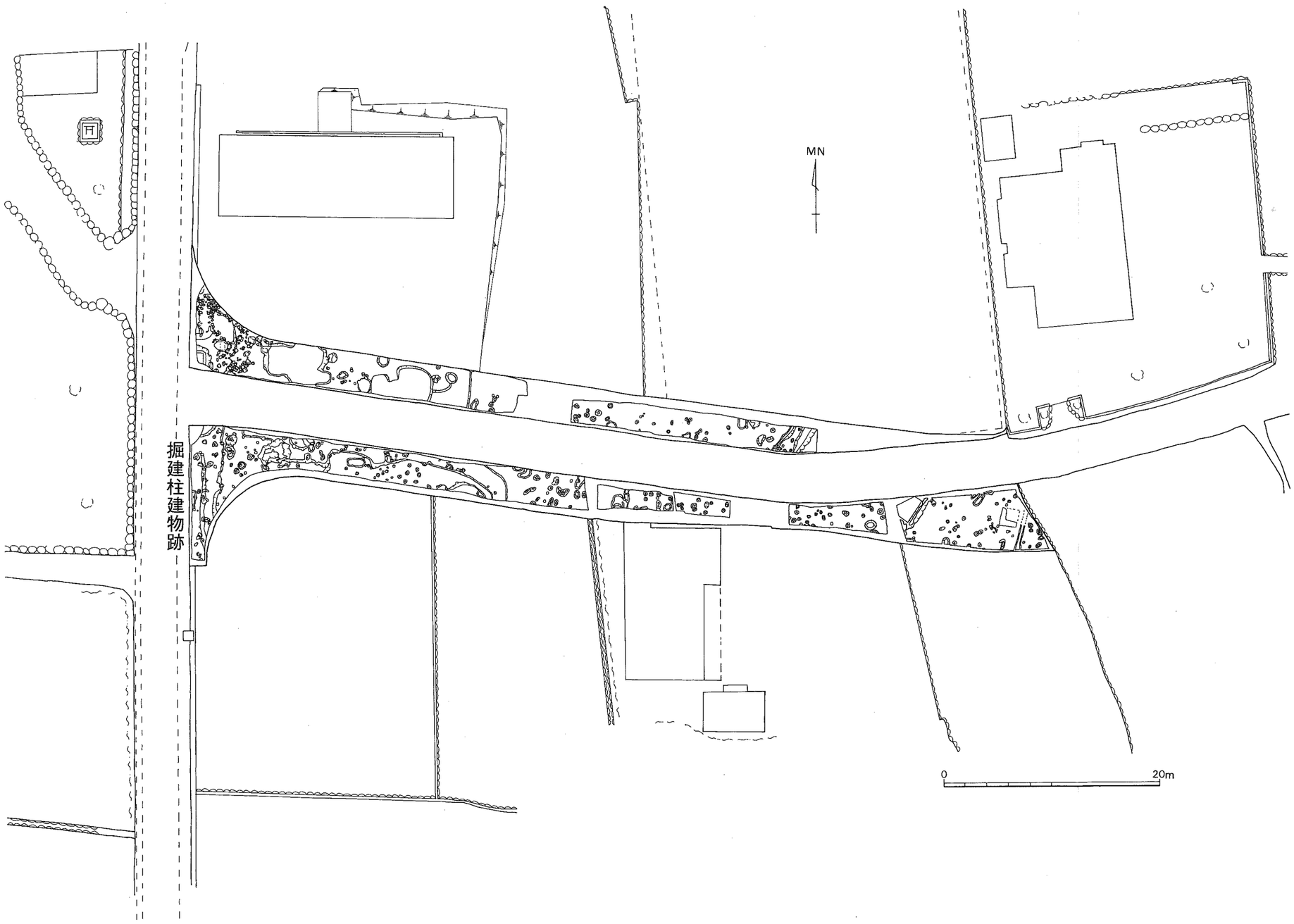
第2図　試掘調査廣及び1～3次調査区域



第3図　1次調査区配置図

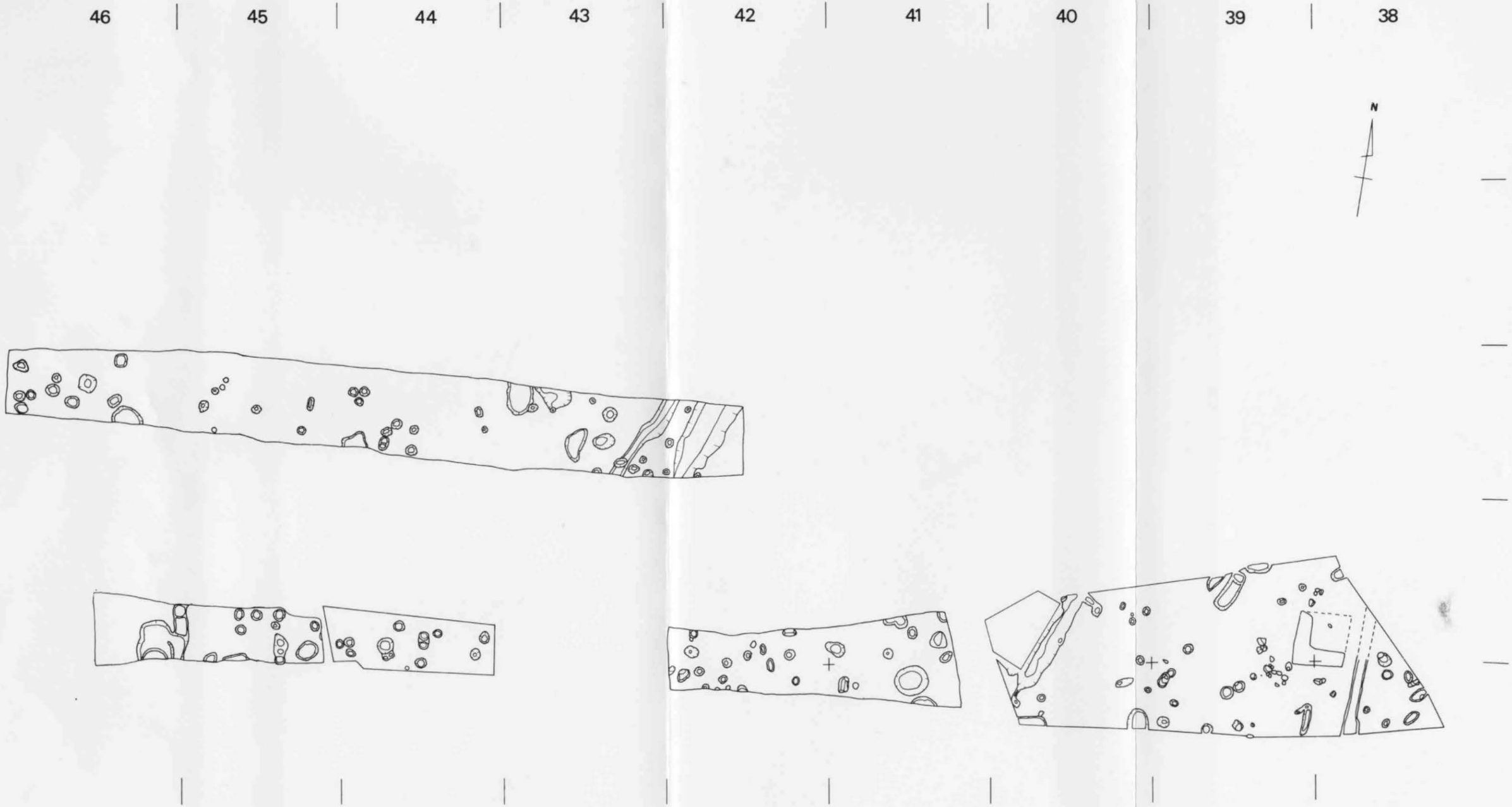


第４図　１次調査区遺構配置図

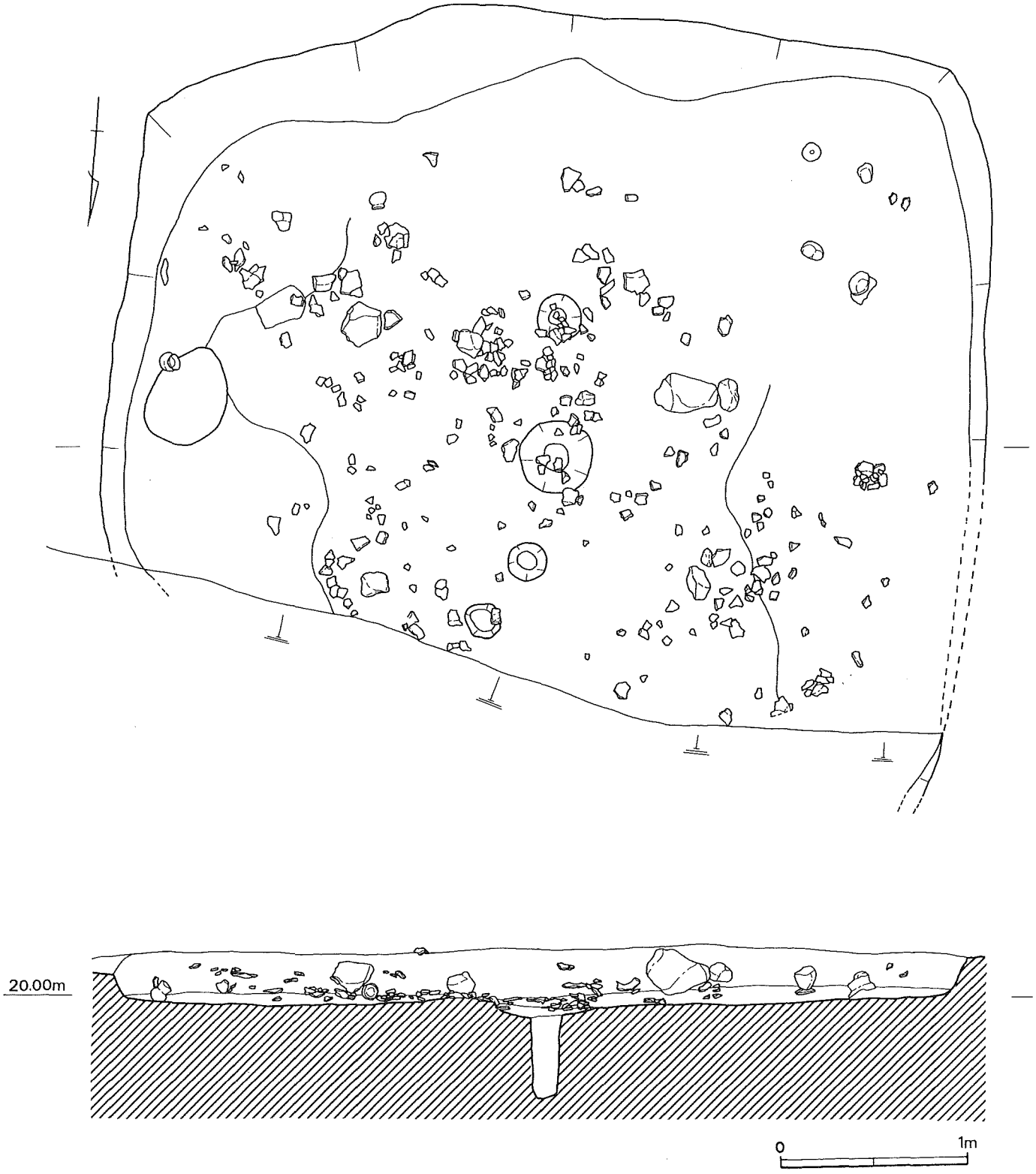


第 5 図　2 次調査区配置図及び遺構検出状況

第 6 図　2 次調査区遺構配置図①



第７図　２次調査区遺構配置図②



第８図　１号竪穴式住居跡（ＳＢ１）

③ 遺　　構

遺構としては，溝状遺構３条と柱穴群，古墳時代前期の竪穴式住居跡１軒を検出したほか，縄文時代晩期の遺物の集中部を数個所発見した。

１号竪穴住居跡（ＳＢＩ）

古墳時代前期の竪穴式住居跡を，Ｃ－７区で検出した。北側は，石垣により切られている。残存する南辺は4.30ｍの方形の住居址で、住居址内の床面には土師器の壺等があった。

④ 遺　　物

遺物は，竪穴式住居に伴う一括資料として土師器の甕・壺や，縄文時代晩期の黒色磨研土器・条痕文土器・扁平打製石斧等が出土した。

１．縄文土器

出土した土器は，縄文時代早期の押型文土器（１），南九州系の円筒文土器（２），晩期前半の土器等がある。深鉢形土器（３～31），浅鉢形土器（52～58），椀形土器（32，33），組織痕土器（35），刻目凸帯文土器（36～41）等がある。

南串山町の国崎遺跡や，東彼杵町の白井川遺跡等の分類や，出土を参考に，深鉢形土器を，Ａ類(直口縁で口縁部が外方に開くもの)，Ｂ類（タガ状口縁をもつもの），Ｃ類（「く」字状口縁をもつもの）に分け，同じく浅鉢形土器をＡ類（直口縁で口縁部が外方に開くもの），Ｂ類（口頸部が短く立ち上がり肩部に最大径をもつもの）に分ける。Ａ，Ｂ双方ともリボン状突起を持つものと持たないものがある。

石器では，石鏃（１～８），グレーバー（９），安山岩製スクレーパー（10，11，16，74，77），黒曜石製スクレーパー（13～15），ピエス・エスキーユ（12），縦長剝片（17～50），石核（51）等がある。外に磨製石斧（52，53），打製石斧（54～68），すり石（69～73，80～82，84，85），砥石（75，76），叩石（78），石臼（83）等がある。

⑤ 所　　見

今回の調査で，古墳時代前期の住居跡や，縄文時代晩期の土器・石器を含む包含層を確認した。

（２） ２次調査

① 調査概要

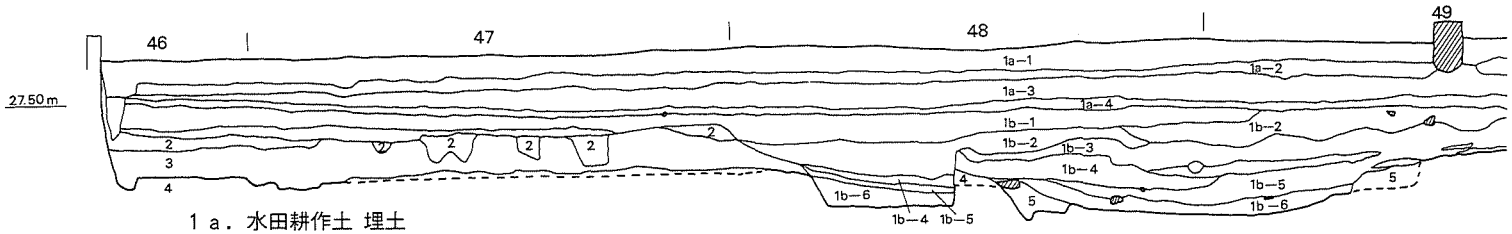
今回の調査は，平成５年度道路拡幅工事区域の西部分（道路基準杭　ＯＭ７・８），650㎡調査を行った。今回の工事区は現有道路を中心に南北各４ｍの拡幅であり，当初は現有道路下も調査対象としていたが，道路下に約２ｍ幅の畑地潅漑水道や，私設水道等が埋設されていたため調査から除外した。

調査区は，平成４年度に設定した５ｍ方眼のグリッドを延長し，続けて番号を伏して設定した。調査は，重機による表土剝ぎを行った後，道路北側から西に向けて掘り下げを行った。

② 土　　層

土層は１ａ層；耕作土層，１ｂ層；中世～近世にかけての整地層，２層；黒色土層（奈良～平安時

（南　　壁）



1 a．水田耕作土 埋土
　1 a - 1　灰色砂粒混在粘質土
　1 a - 2　暗褐灰色　〃　（床土）
　1 a - 3　暗灰色　〃
　1 a - 4　明褐色　〃　（床土）

1 b．整地層（中世～江戸初期）柱穴，須恵質こね鉢，青磁等出土。
　1 b - 1　暗灰色砂質土
　1 b - 2　黒色砂質土
　1 b - 3　暗赤褐色砂質土
　1 b - 4　黄色土，黒色土，青白色砂混在砂質土
　1 b - 5　黒灰色砂質土
　1 b - 6　黄色土，黒色土混在砂質土

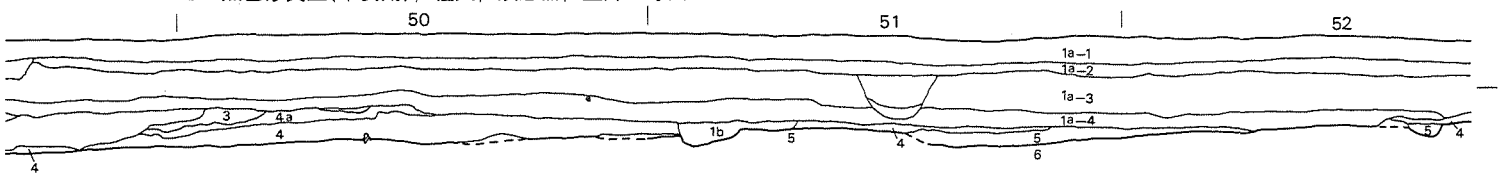
2．黒色砂質土（平安期），柱穴，須恵器，土師皿等出土

3．青白色砂層（火砕流）

4．明黄色粘質土，縄文早期土器，石鏃等出土。

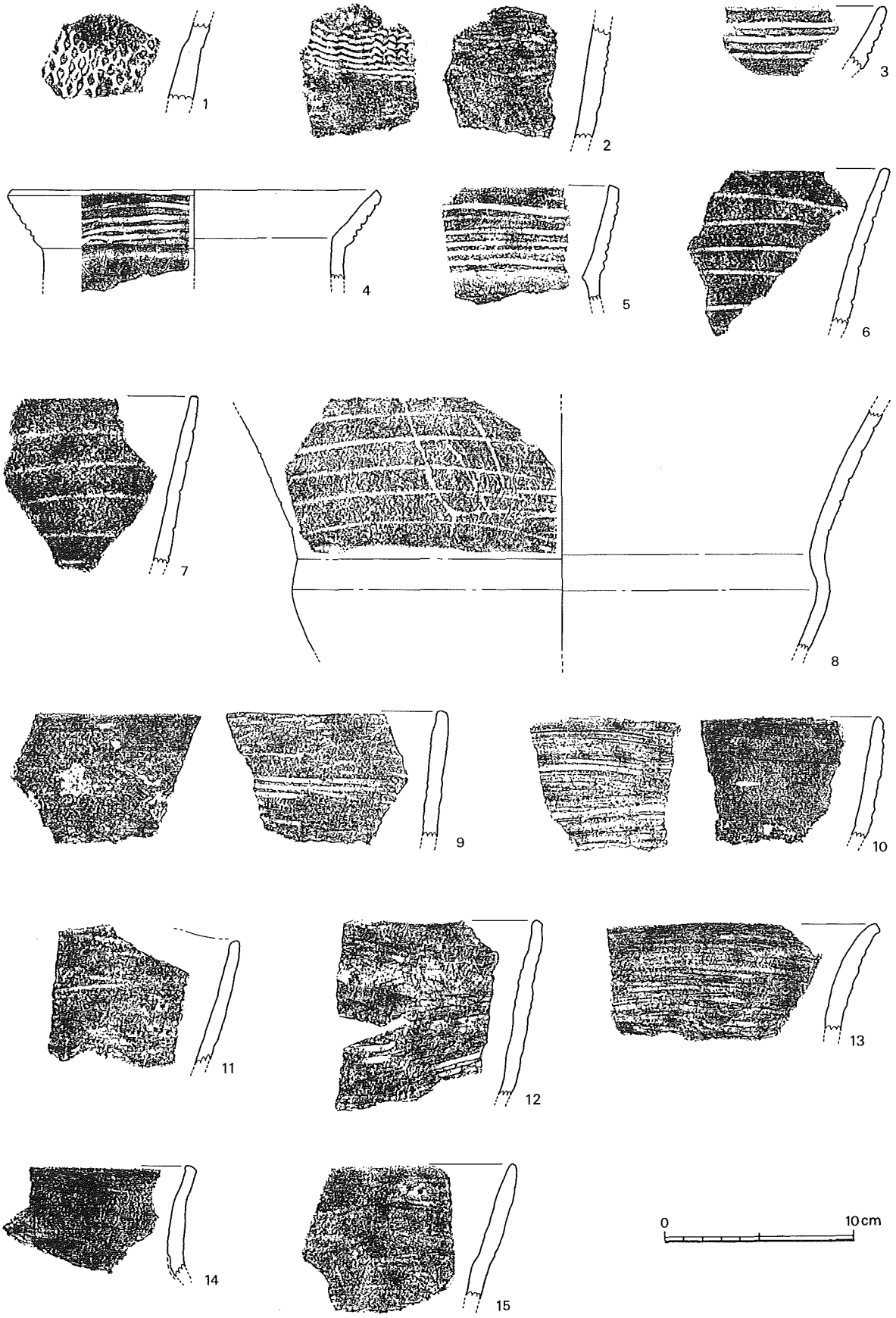
5．黒色粘質土，パミス少量含む

6．暗灰色硬質土パミス土層（百花台４層に相当）

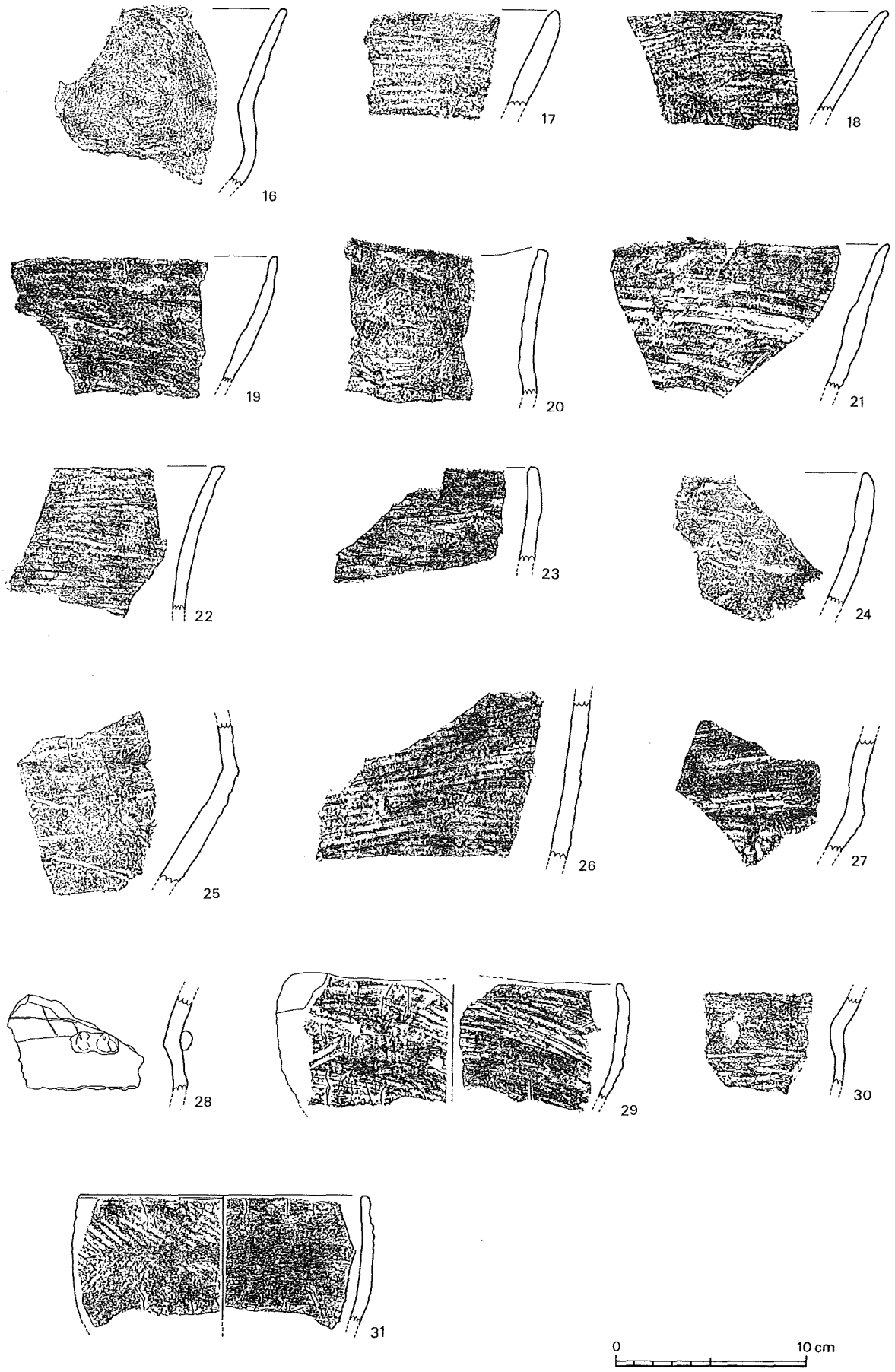


0　5m

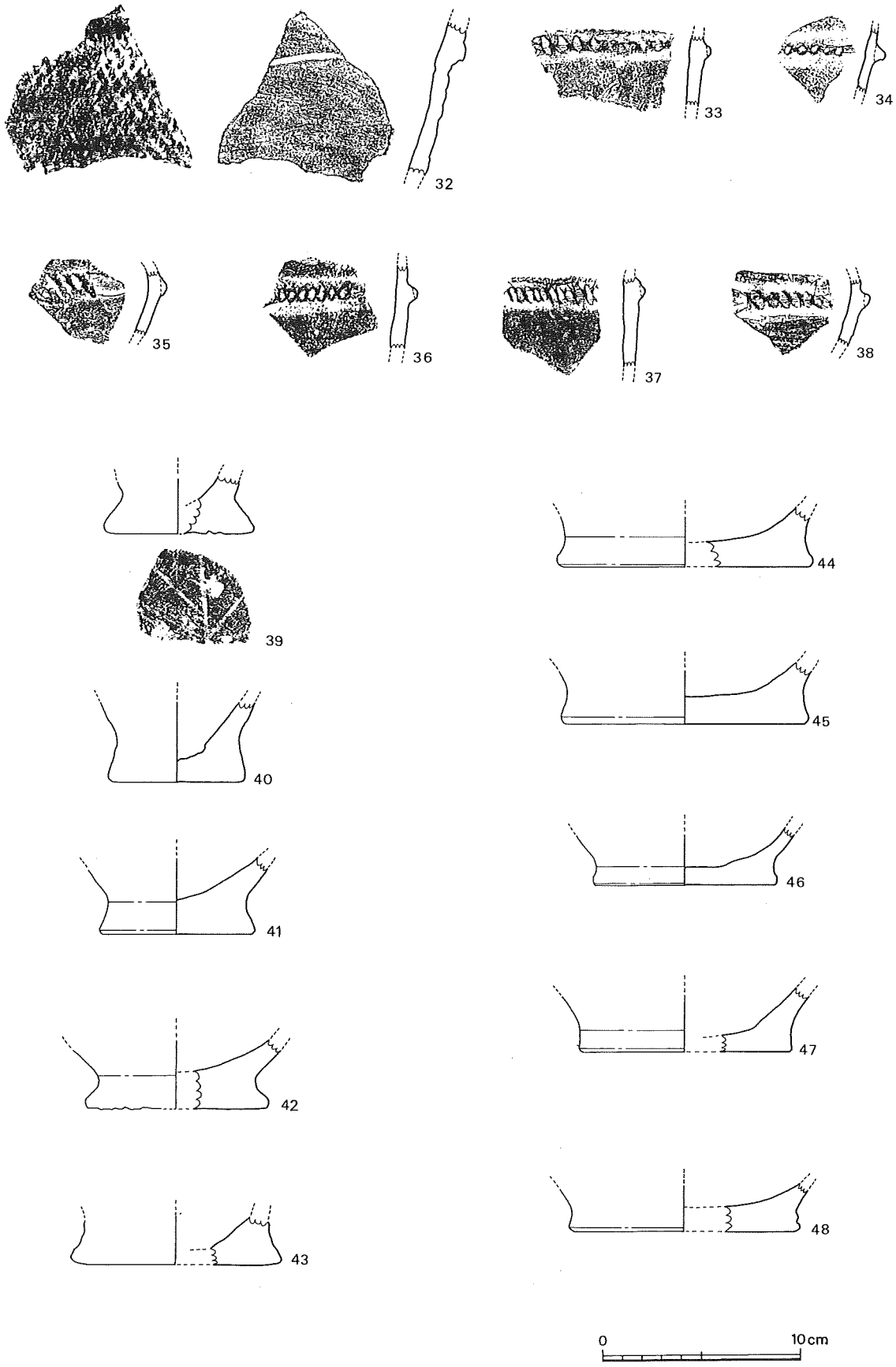
第９図　２次調査区土層図



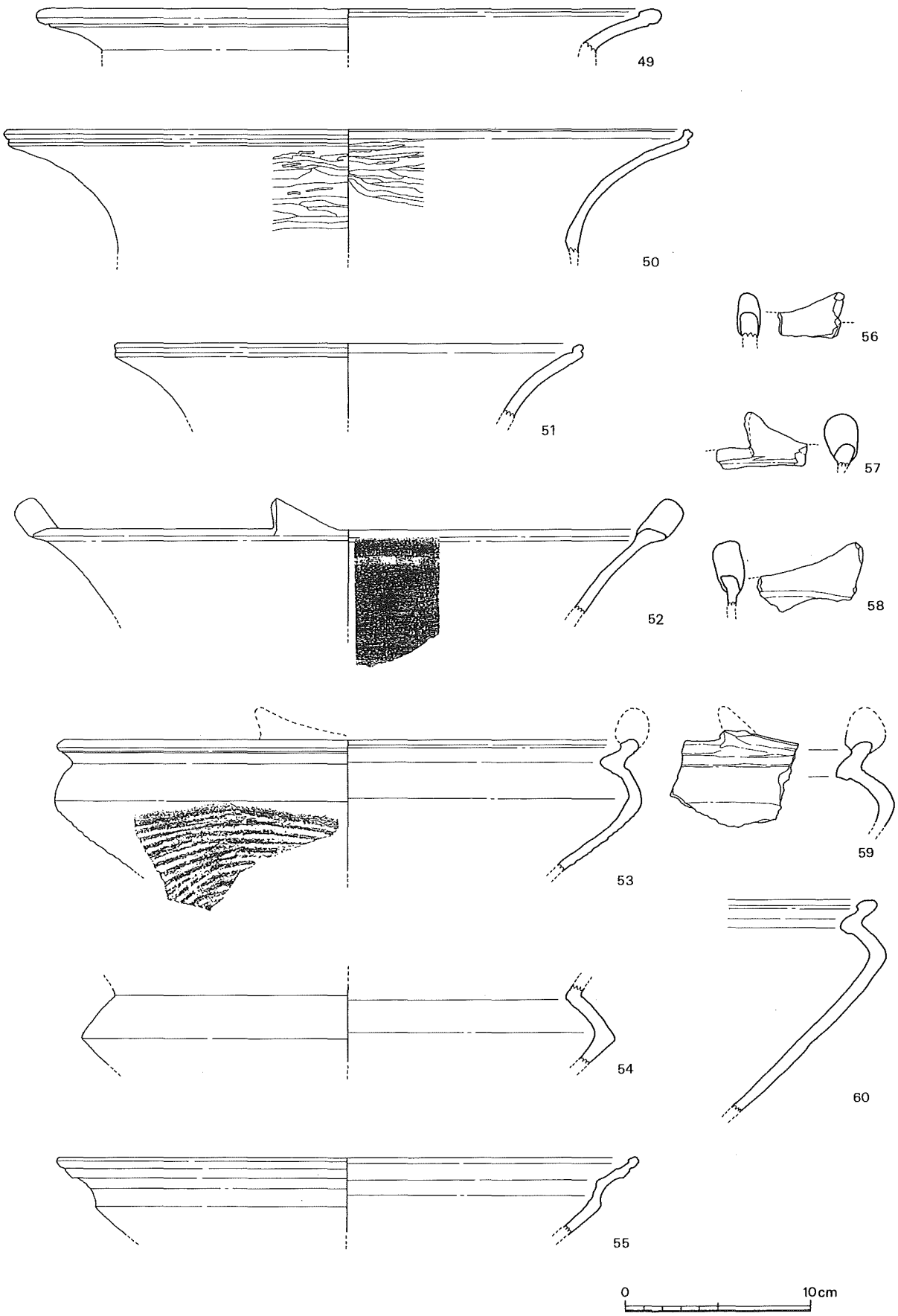
第10図　出土土器①



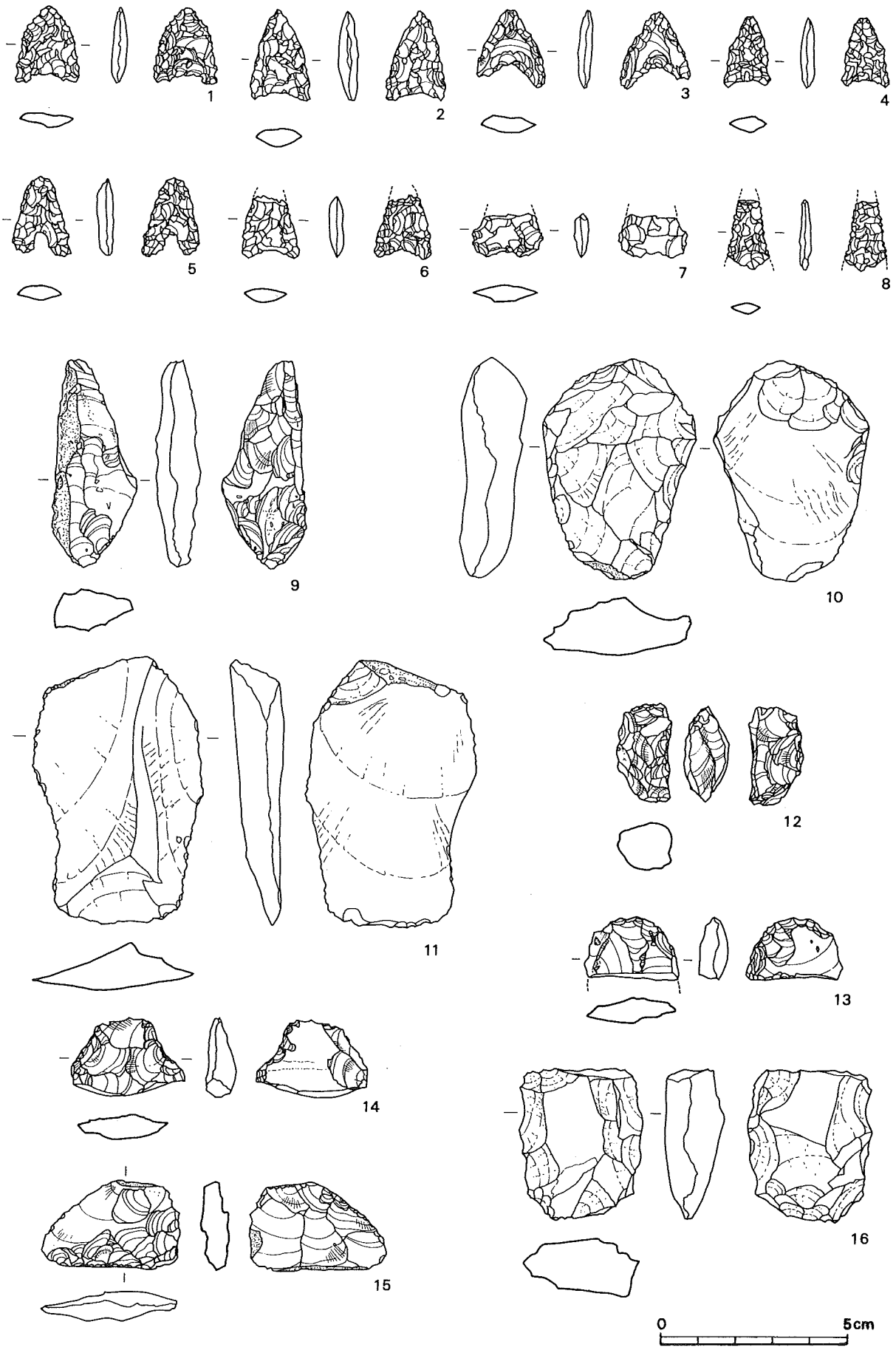
第11図　出土土器②



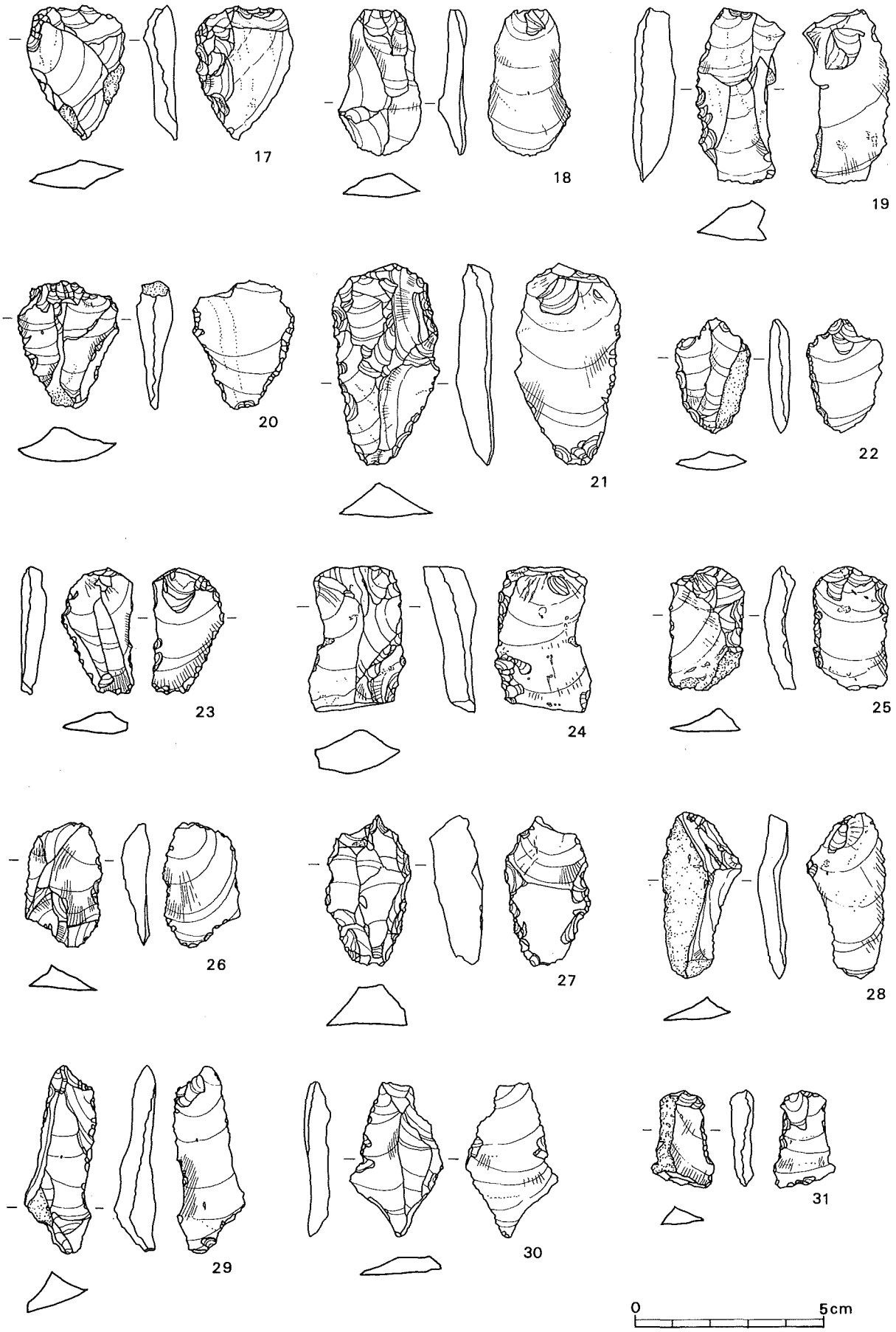
第12図　出土土器③



第13図　出土土器④

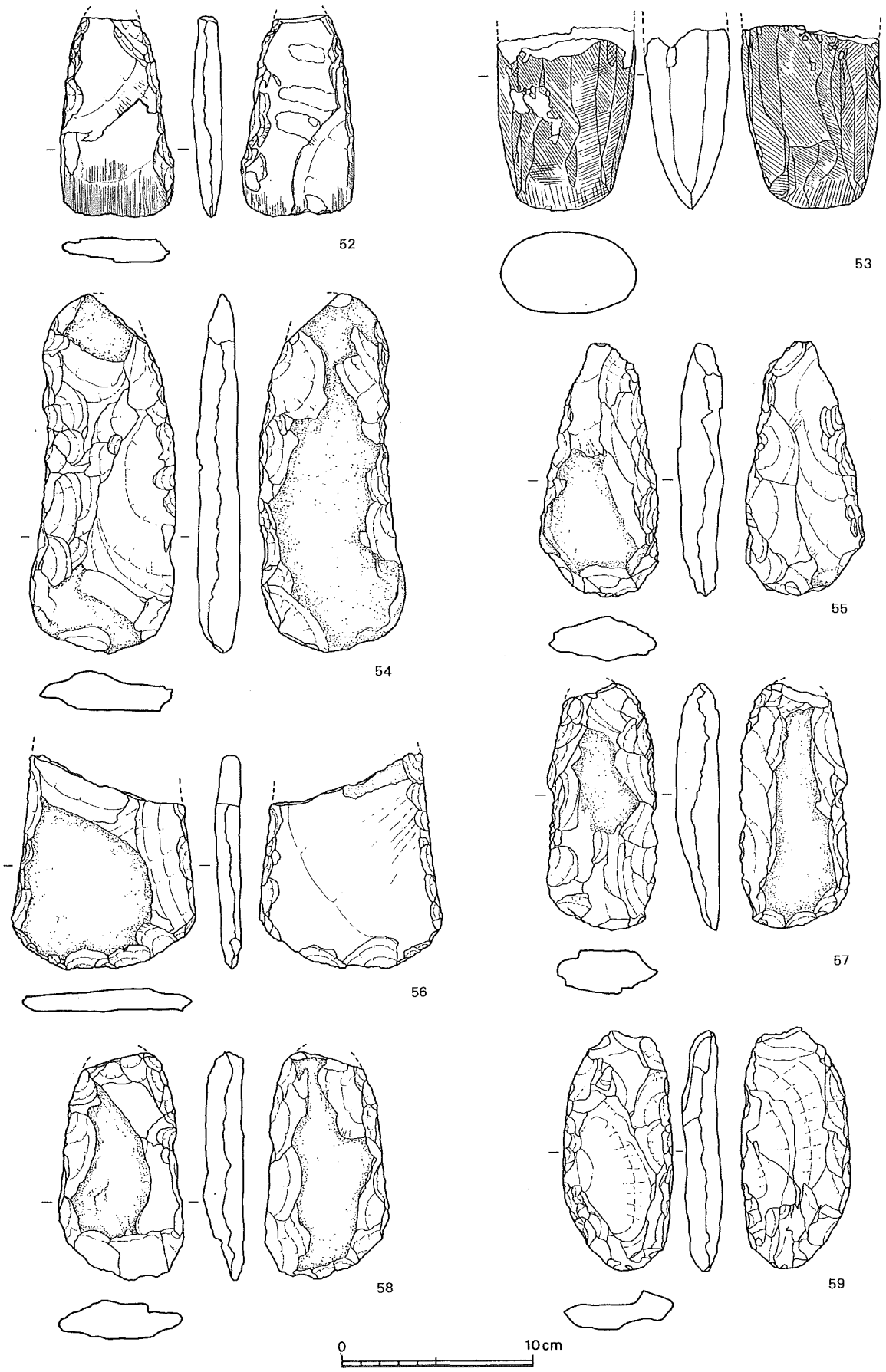


第14図　出土石器①

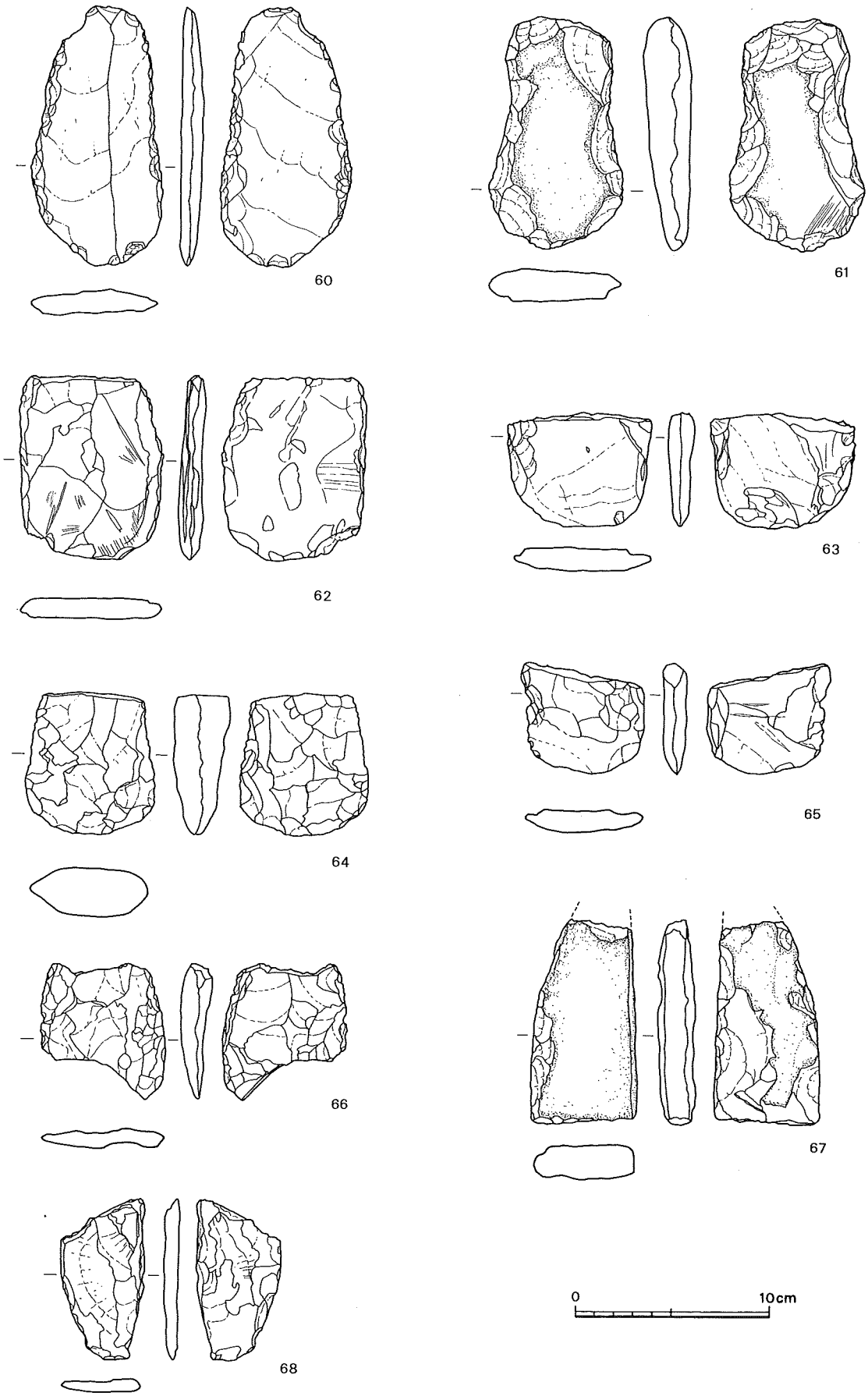


第15図　出土石器②

第16図　出土石器③



第17図　出土石器④



第18図　出土石器⑤

第19図　出土石器⑥

代遺物包含層)，３層；青白色砂層，４層；明黄色粘質土層（縄文土器を若干含む)，５層；黒色粘質土層，６層；暗灰色硬質土層（パミス含む）である。

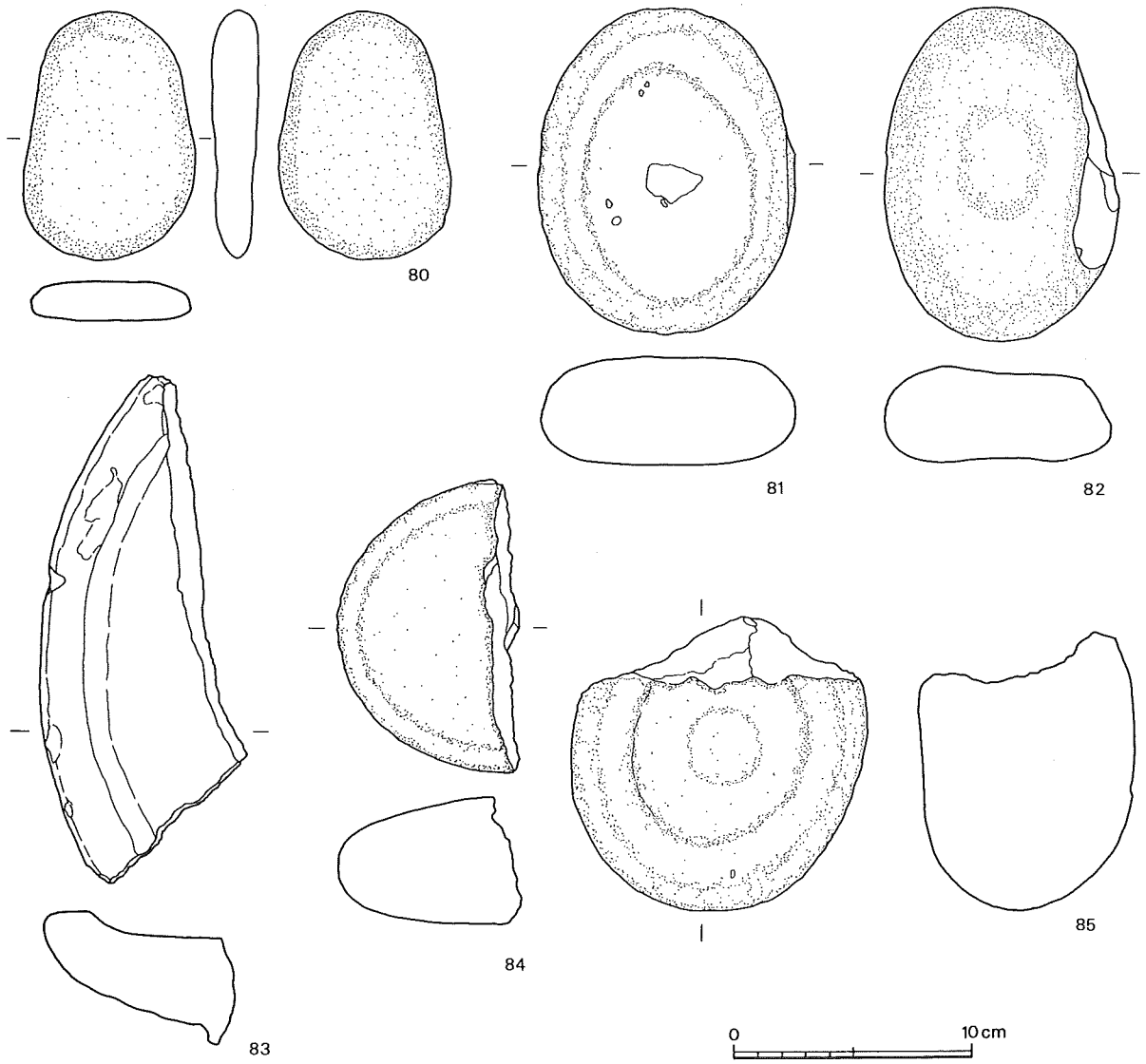
③　遺構・遺物

遺構は，幅２ｍの溝状遺構が１条と，調査区全域にわたり柱穴が検出され，恐らく，近世のものと思われる建物跡を１棟確認した他は，建物跡等を特定するには至っていない。

遺物は，Ｉｂ層から中世～近世にかけての青磁･須恵質土器･陶磁器等が出土し，２層から奈良～平安期の須恵器・土師器，４層から縄文時代早期の土器・石器等が多数出土した。

④　所　　見

今回の調査では，奈良～平安時代にかけての遺物・遺構の存在が確認され，古代に於いても当地に生活が営まれていたことが判断される。また，関連する道路や集落の存在も予想される。他に近世のものと思われる建物跡を１棟確認した。



第20図　出土石器⑦

第2表　各区出土の土器①

番　号	出　土　地　区	特　　徴	備　　考
1	B2II	押型文土器	
2	B4，5ミゾ	南九州系円筒土器	
3	G10　II P15	深鉢形土器B類，沈線がV字状。	
4	F11 P16，17	〃　　〃	
5	F9 P14	〃	
6	ミゾ	深鉢形土器A類	
7	F10 aミゾ5	〃	
8	F10 P14	〃	
9	B5 P32	粗製土器	
10	B5 P23	〃	
11	F10 P25	〃	
12	C5III P25	〃	
13	F10 28	〃	
14	F10 P16	〃	
15	F10 P15	〃	
16	F10 P15	〃	
17	10a ミゾ1	〃	
18	F10 ミゾ5	〃	
19	C5III P2	〃	
20	ミゾ	波状口縁	
21	C5III P5	粗製土器	
22	F10 P13	〃	
23	C5III P11	〃	
24	B5 P3	〃	
25	F10 P13	〃	
26	F10 ミゾ5	〃	
27	F10 ミゾ5	〃	
28	F9 P16	リボン状突起	
29	F10 P7	粗製土器	
30	F9 P1	〃	
31	G10 P1	〃	
32	F10 P20	組織痕土器	

第3表　各区出土の土器②

番　号	出　土　地　区	特　　徴	備　　考
33		刻目凸帯文土器	
34		〃	
35		〃	
36		〃	
37		〃	
38		〃	
39		木葉圧痕ある底部	
40	F10 ミゾ5	底　部	
41	ヒエ10II	〃	
42	EG10 I	〃	H 5 調査
43	G10 P5	〃	
44	G10 P2	〃	
45	G11 P20	〃	
46	G10 P4	〃	
47	F10 ミゾ5	〃	
48	E9 P6	〃	
49	E10 P1	浅鉢形土器A類	
50	C5 III	〃	
51	G10 P5	〃	
52	G11 P21	〃　　リボン状突起がある	
53	EF10 I	浅鉢形土器B類　　〃	
54	C5 III P3	〃	
55	A-D1ミゾ3, 4P5	〃	
56	E10, 1	リボン状突起残欠	
57	EF8 I b	〃	
58	F10III	〃	
59	EF10II	〃	
60	F10 P3	〃	

第4表　各区出土の石器①

番　号	出　土　地　区	器　　種	備　　考
1	FG11 I	石　鏃	
2	EF8 I b	〃	
3	H10	〃	
4	EF9III	〃	
5	B06 I	〃	
6	10II	〃	
7	3III	〃	
8	A1ミゾ3	〃	
9	B5 S6	スクレーパー	
10	E7 S1	安山岩製スクレーパー	
11	A2，B2カベV	〃	
12		ピエス・エスキーユ	
13	FG10，11II b	黒曜石製スクレーパー	
14	BC4 I b	〃	
15	H10	〃	
16	EF10II	安山岩製スクレーパー	
17	FG10，11II b	縦長剝片	
18	F10a ミゾ5	〃	
19	G10	〃	
20	G10III	〃	
21	GH11 I	〃	
22	F9 I	〃	
23	G10	〃	
24	GH11III	〃	
25	EF8 I b	〃	
26	B5 S1	〃	
27	AB3 I	〃	
28	G10	〃	
29	EF9II	〃	
30	EF4II	〃	
31	ミゾ	〃	
32	1VI	〃	

第5表　各区出土の石器②

番　号	出　土　地　区	器　　種	備　　考
33	FG10, 11II b	縦長剝片	
34	EF10II	〃	
35	B5II下	〃	
36	EF10II	〃	
37	1VI	〃	
38	1VI	〃	
39	B1 I b	〃	
40	FG11 I	〃	
41	5 I	〃	
42	3III	〃	
43	EFG10 I	〃	
44	EFG10 I	〃	
45	5III	〃	
46	FG10, 11II b	〃	
47	F9 I	〃	
48	BC6 I	〃	
49	B2 I b	〃	
50	FG10, 11II b	〃	
51	G10III	石　核	
52	5III	磨製石斧	
53	E9 S4	〃	
54	C9III	打製石斧	
55	C8III	〃	
56	E10 S1	〃	
57	G11 S6	〃	
58	G10II	〃	
59	G10 S3	〃	
60	G10II下	〃	
61	ミゾ	〃	
62	EF9 I	〃	
63	B2	〃	
64	G11 S3	〃	

第6表　各区出土の石器③

番　号	出　土　地　区	器　　種	備　　考
65	A1 Ⅰb	打製石斧	
66	EF10Ⅱ	〃	
67	F9 S6	〃	
68	F8 S1	〃	
69	G10 S1	すり石	
70	F9 S5	〃	
71	F9 S2	〃	
72	F9 S7	〃	
73	4Ⅱ	〃	
74	F10 S1	安山岩製スクレーパー	
75	FG5Ⅰb	砥　石	
76	FG5Ⅰb	〃	
77	F9 S4	安山岩製スクレーパー	
78	F39Ⅰ	叩　石	
79	F9 S1	すり石	
80	F10 S4	〃	
81	F40	〃	H5調査
82	4Ⅱ	〃	
83		石　臼	
84	F40	すり石	H5調査
85	C7，8 S1	〃	

⑤　１号竪穴住居跡（ＳＢ１）出土の古式土師器（第21図，図版９）

（１）　古式土師器の出土状況

竪穴式住居跡の床面より古式土師器が出土した。このうち図化できた資料は16点であった。出土状況図は第24図のとおりである。

（２）　甕形土器

形態によりＩ類（１，２）とII類（７～13）に分類した。

（ア）　甕Ｉ類（１，２）

１は口径13.9cm，胴部最大径21.9cm，器高26.1cmの甕形土器である。口縁部は，く字状に外反し，内湾しながら口唇部にいたる。口縁部外面はわずかに波打ち，横にナデられている。口唇部は肥厚し，内傾しながら内側に突出する。突出部の頂部は面取りしたように平滑にナデられている。胴部最大径は中位にあり，底部は丸底である。外面は縦位のハケが施され，肩部外面のハケメはヨコナデによって消されている。肩部内面に，カキメ状の粗いハケが施され，その後，胴部から底部にかけてヘラケズリが行われている。ヘラケズリは口頸部屈曲部まで及ばない。頸部内面はカキメ状のハケののちに，細かいヨコハケが施される。また肩部と口頸部との接合痕が明瞭に残る。これらの調整痕から推定される甕の成形過程としては，胴部と口頸部を接合し，体部内面をカキメ状のハケで調整したのち，接合部にナデや細かいヨコハケを施し，そのあとに胴部および底部内面のヘラケズリをおこなったものと観察される。胎土には直径１～２㎜の砂粒が含まれる。

２も１と同様な甕形土器であるが，１のような口唇部の肥厚はみられない。内外面の調整は１と同様である。口縁部の残存が少なく，口径の復元はできなかった。胎土に絹雲母を多く含む。

（イ）　甕II類（７～13）

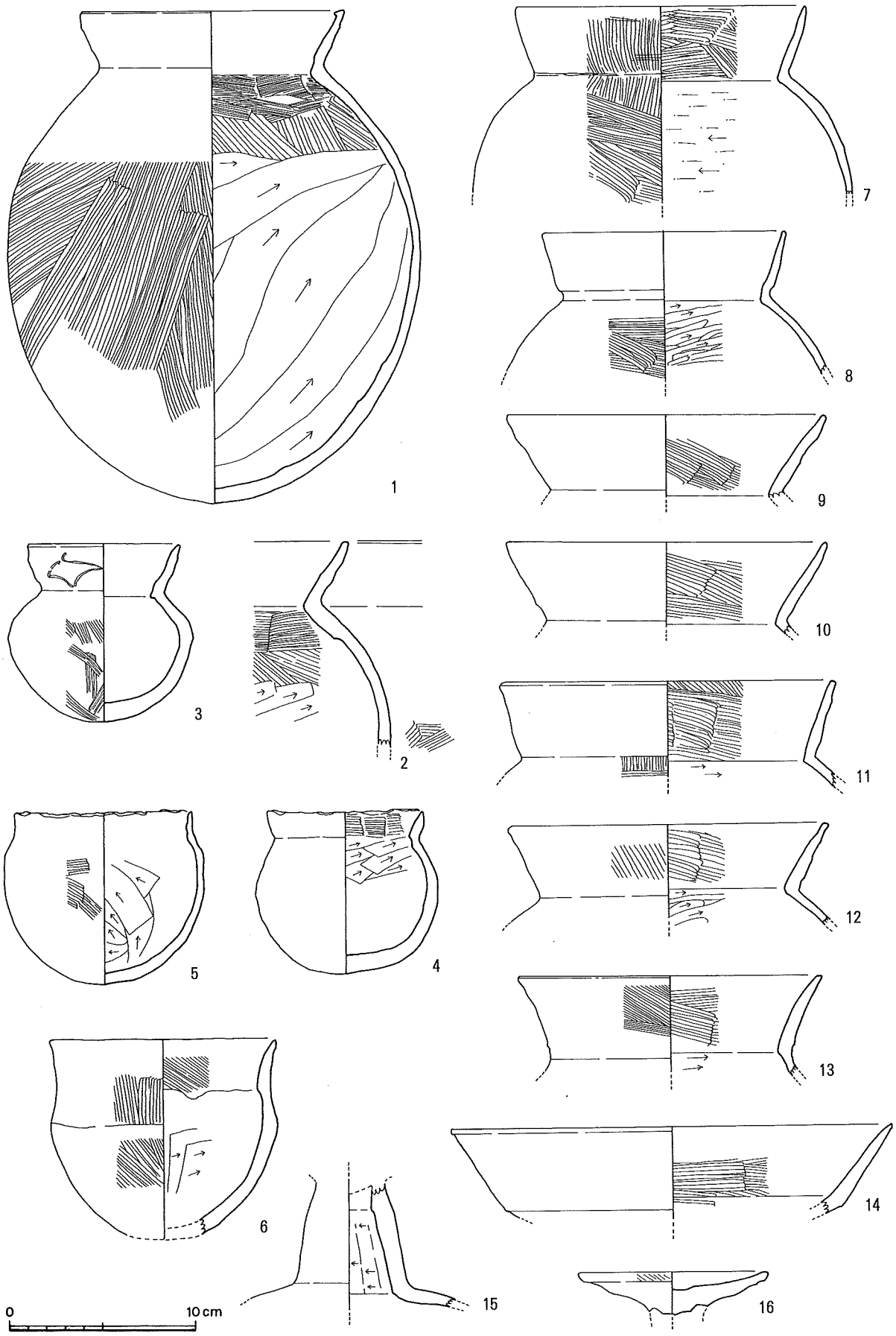
いずれも口縁部が「く」字状に開く資料であるが，口縁部の形態によって，IIａ類（口縁部が内湾するもの），IIｂ類（口縁部がまっすぐ外方に開くもの），IIｃ類（口縁部が外反するもの）の３つに分類できる。

①　IIａ類（７・８）

７は復元口径15.4cmである。口縁部外面は縦方向のハケが施され，そののち部分的にヨコハケで調整されている。肩部外面は上半が口縁部と一連のタテハケで，下半はヨコハケないし斜めのハケである。調整順序としてはタテ方向→ヨコ方向のハケが施されている。口縁部内面はヨコハケが施され，肩部内面はヘラケズリがおこなわれている。口頸部と肩部との境となる屈曲部までヘラケズリが及んでいる。**８**は７と同類であるが頸部外面に弱いくびれをもつ点が異なる。口縁部外面は丁寧なナデ調整で，それが肩部上半にもおよぶ。肩部下半はヨコハケが施されている。口縁部内面も外面と同様に丁寧なハケ調整が行われ，肩部内面はヘラケズリである。７と同様に屈曲部のきわまでけずられている。胎土は精選され，焼成も良好である。

②　IIｂ類（９～12）

９～12は口縁部付近の異個体の破片資料である。いずれも復元口径がほぼ17cm前後で，調整も口縁



第21図　古式土師器①（1号竪穴式住居跡出土　S＝1／3）

部内面のヨコハケ，屈曲部ぎりぎりまで内面ヘラケズリがおこなわれるなど共通した技法がうかがえる。口縁部外面は丁寧なヨコナデがおこなわれているが，12の資料により，ヨコナデ以前に斜方向のハケ調整がおこなわれていたことが知れる。

③　IIc類（13）

13は復元口径16.1cmである。口縁部の形態は異なるものの調整はIIa類，IIb類と同様である。

（3）　小形丸底土器（3～6）

3は口径8.1cm，胴部最大径9.8cm，器高9.4cmを測る。胴部最大径はやや上位にあり，頸部のくびれも強い。口縁部は内湾し，内外はわずかに波打つ。口縁部外面にはヘラによって，菱形に近い意匠が描かれている。器体の内外面は全体にていねいにナデられており，胴部外面には部分的に細かいハケメが認められるのみである。胎土は精選されており，焼成もよく，丁寧なつくりである。4は短頸の小形丸底壷である。口径8.2cm，胴部最大径9.6cm，器高8.6cmをはかる。胴部最大径は中位にあり，頸部のくびれは弱く，口縁部は外面がやや内湾する。口縁外面の調整は，ヘラケズリないしヘラナデのあとナデ消されている。口縁部内面は細かいヨコハケが施され，肩部内面にはヘラケズリが行われている。胴部底部内面はヘラケズリされたのちにナデ消されている。3に比べると成形が粗である。

5も短頸の小形丸底壷で，全体の1／2ほどが残存している。口径9.4cm，胴部最大径10.6cm，器高8.5cmである。胴部最大径はやや上位にあり，胴部から口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁端は手ずくねによって成形されており，凹凸や亀裂が生じている。体部外面はヘラケズリないしはヘラナデにより調整され，部分的にハケメがみられる。体部内面はヘラケズリによって器壁は薄く仕上げられており，口頸部内面はナデ消されている。成形や焼成などは4に類似する。胎土には多くの絹雲母をふくむ。

6も短頸の小形丸底壷で，全体の1／2ほどが残存する。図上復元をおこなったが，底部を欠失しているため，全体の形状は不明である。復元した口径と胴部最大径はほぼ等しく12.0cm，復元器高は10.7cmである。口縁部はわずかに外反して開く。頸部内面には口頸部と胴部の接合痕が明瞭に残る。調整は口縁部外面がヨコナデ，内面は斜めのハケののち上半をナデ消している。体部外面は底部から口縁部に向かってタテ方向のハケが施されている。体部内面はヘラケズリで器壁を削ったのちに口頸部を接合している。胎土には絹雲母，赤色砂などを含み，粗い。

（5）　高杯形土器（14・15）

14は杯部片である復元口径は23.4cmで，深さは不明である。口唇部は，わずかに外へ肥厚する。調整は杯外面がヨコナデ，杯内面はヨコハケである。15は脚部片で裾部は失われている。脚柱部は中空で，裾部との境で大きく屈曲する。脚の内外面は丁寧にナデられており，胎土・焼成もよい精製品である。脚柱部の内面は丁寧なヘラケズリがみられる。

（6）　器台形土器（16）

16は器台の受部である。受部の径は10.0cmである。受部先端は斜めに面とりがおこなわれ，その部分に斜行のハケメが観察される。受部内面はヘラにより円を描くようにナデつけられている。胎土に

は角閃石を含み，焼成は良好である。

⑥　１号竪穴式住居跡（ＳＢ１）以外から出土した古式土師器

（１）　甕形土器（19）

「く」字形に屈曲する口縁部をもつ甕形土器である。Ｂ６区II層から出土した。復元口径21.1cmである。口縁部は内湾し，口唇部はまるくおさめる。口縁部内外はナデによって消されているため，調整はわかりにくいが，内外ともにヨコハケの痕跡が認められる。内面屈曲部のきわまでヘラケズリがおこなわれている。胎土に赤色砂，角閃石を含む。

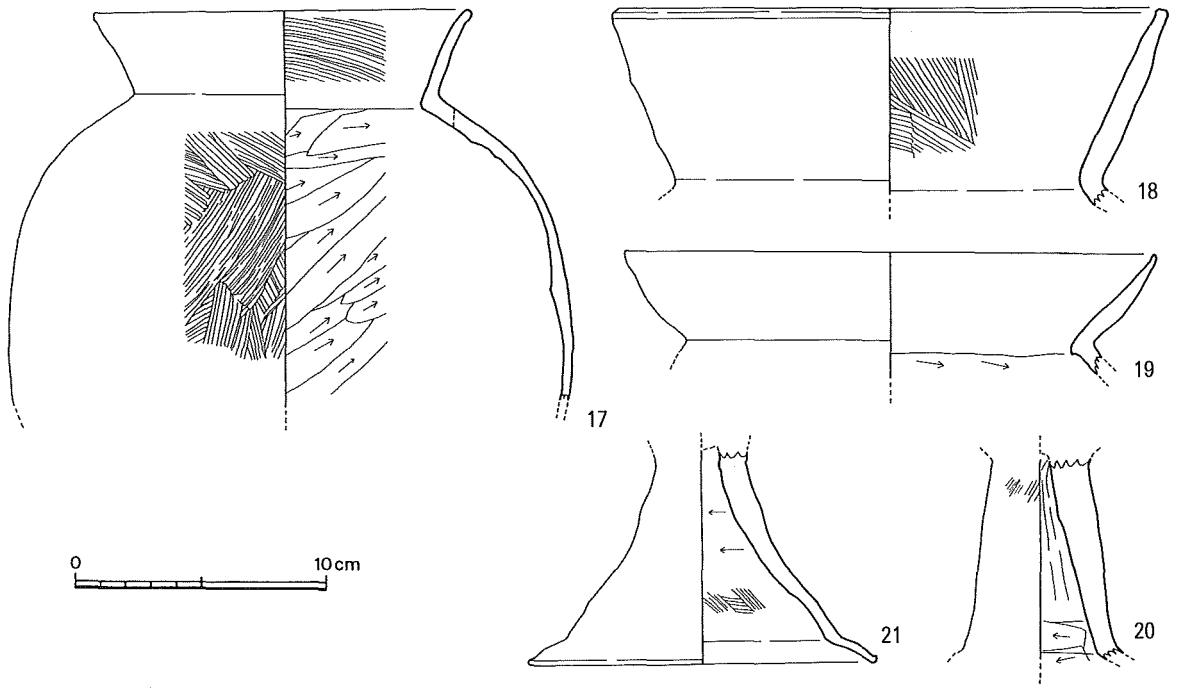
（２）　壷形土器（17・18）

17は口縁部がやや外反しながら立ち上がる資料である。口縁部は完存するが，胴部下半から失われている。Ｂ６区II層の第９ピットより出土した。口径14.9cm，胴部最大径22.4cmを測る。口唇部は外側に若干肥厚し，突出する。調整は口縁部外面から肩部上半はヨコナデが施され，肩部や胴部のハケメを消している。口縁部内面はヨコハケがほどこされているが，部分的にナデ消されている。肩部・胴部内面はヘラケズリが屈曲部までおよんでいる。胎土には角閃石を含む。

18は直口の壺形土器の口縁部片である。Ｂ６区II層の第２ピットから出土した。復元口径は22.0cmである。口縁部外面はわずかに波打ち，口唇部で肥厚して，口縁内側に突出する。口縁部外側はヨコナデによって平滑にされ，口縁内部はハケがほどこされるが，部分的にナデ消されている。肩部以下の内面ヘラケズリの状況はうかがえない。

（３）　高杯形土器（20・21）

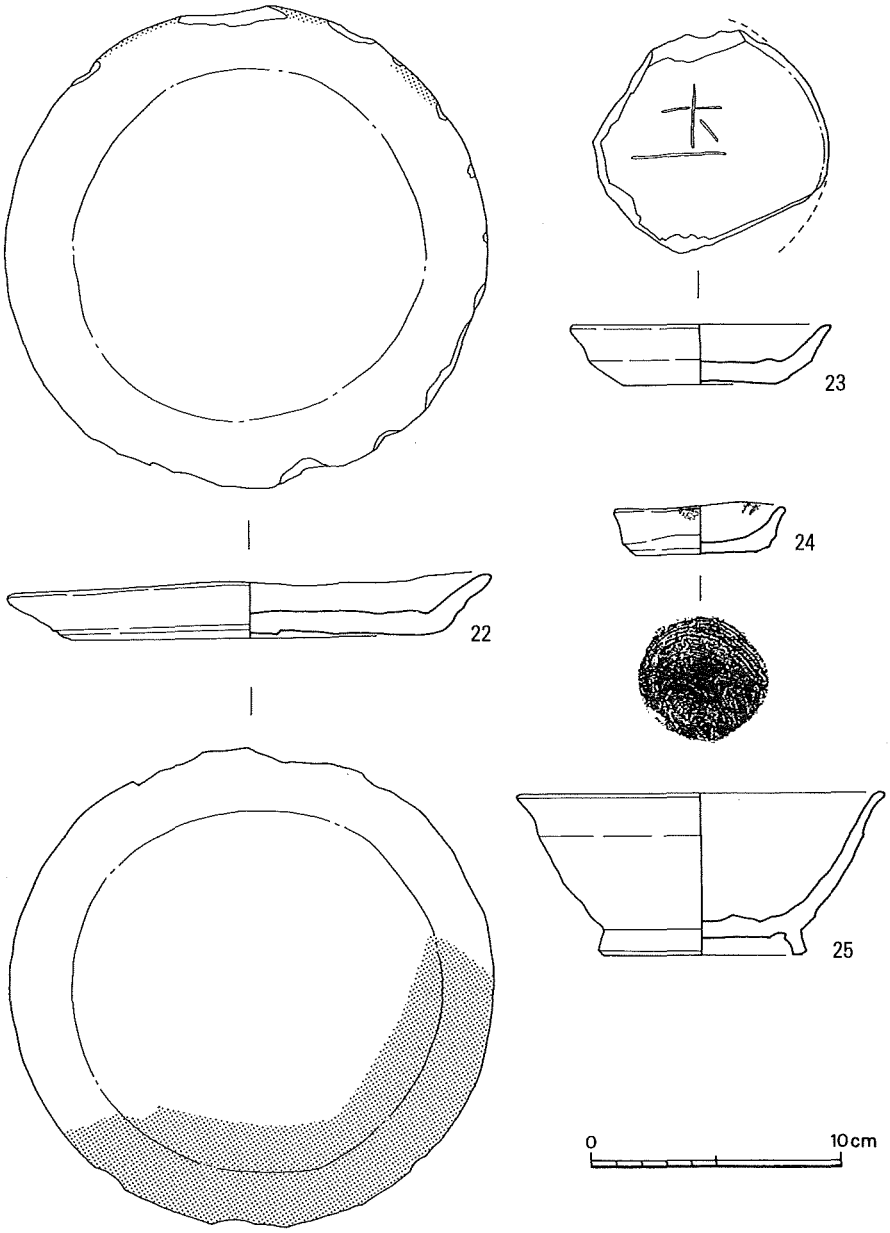
20は脚柱部の破片で，全体の１／２ほどの資料である。第４試掘坑II層から出土した。真中がやや



第22図　古式土師器②（Ｓ＝１／３）

膨らみながら裾部にいたる。脚柱部と裾部の境はおおきく屈折する。外面は斜め方向のハケ調整ののちにナデ消されている。内面はヘラケズリののちに下から上に向かってナデつけられている。胎土には赤色砂を含む。

21は柱状部から裾部までなだらかなスカート状に開く脚部をもつ。F9区第22ピットから出土した。裾部の復元径は13.7cmである。外面は丁寧なヨコナデが施され，内面は柱状部がヘラケズリされ，裾部内面はナデ調整ののちに，部分的にハケメが施される。



第23図　古代・中世の土師器（S＝1／3）

3．古代・中世の土師器（第23図・図版9）

（1）　皿（22・23・24）

22はF32区第1ピットから完形で出土した。口径19.1cm，器高2.3cm，底部径14.5cmである。底部はヘラ切り離しであるが，底部中央部は小さく突出する。内外面はナデによって成形されている。口縁部には成形時の欠損を小粘土塊で補修した痕跡がみられる。器外面の1／3には赤彩がみとめられる。胎土は精選され，焼成も良好である。

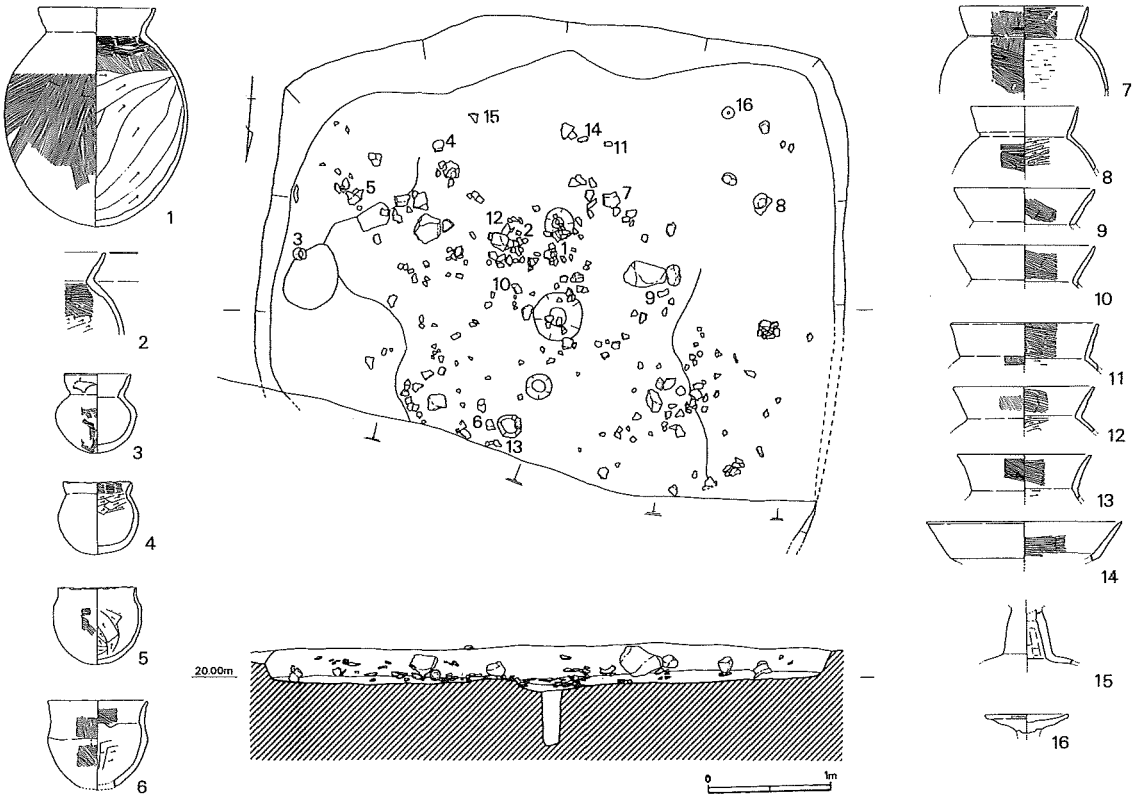
23は残存率１／３の資料である。Ｅ38区ＩＩｂ層から出土した。復元口径10.4cm，器高2.4cm，底部径6.0cmである。底部は回転ヘラ切り離しによったあと，ナデられている。杯外面下半はヘラケズリによって成形されている。ロクロの回転方向は左回りである。内面はナデ調整で，中央にはヘラによる線刻記号がみられる。線刻は「土」の字に似ているが，点が付いているところが異なる「土」の異字体であろうか。胎土には赤色砂を含み，焼成も良好である。**24**は灯明皿で，Ｆ51区第１ピットから完形で出土した。口径6.8cm，器高2.0cm，底部径4.8cmである。底部は糸切り離しで，ロクロの回転方向は左回りである。内外面はナデによって調整されている。口縁部内面の２ケ所に煤の付着がみられる。

（２）　杯（25）

25は高台付きの杯である。Ｅ９区の第14ピットから出土した。口縁部を大きく欠損するが，外反する口縁部と高台上部から外方に開く体部をもつ杯である。復元口14.6cm，器高6.4cm，高台径6.2cmである。高台は外方に開き，畳付けの部分は面取りをして平滑にしあげている。胎土に赤色砂を含み，焼成はよい。

（３）　小　　結

これらの土師器は**22**，**25**が９世紀後半，**23**は13世紀前半，**24**は13世紀後半から14世紀前半のものとみられる。



第24図　古式土師器出土状況（１号竪穴式住居跡Ｓ＝１／60，土器Ｓ＝１／９）

⑦　稗田原遺跡住居跡出土の古式土師器について

（1）　はじめに

稗田原遺跡の住居跡からは，古式土師器の一括資料が出土した。本県では古式土師器の出土が少ないうえに，遺構からの一括資料となるとさらに少なく，貴重な資料といえる。

近年，古式土師器の研究は畿内において庄内式，布留式土器の細分が進み，その併行関係を各地域で模索する状況で研究が進んでいる。九州においても畿内その他の外来系土器と在地系土器の検討を軸として，編年案が提示されている。これに対し，長崎県の古式土師器研究は資料的制約から研究が進んでいないのが実状である。ここでは最近の古式土師器研究の成果を援用しながら，有明海西部地域出土の古式土師器[註1]を概観し，おおまかな時期区分を行ったのちに，本遺跡出土土師器の位置づけを考えてみたい。

（2）　古式土師器研究の現状

九州における古式土師器の研究はとくに福岡県で精力的に行われており，北部九州域を対象とした編年案が提示されている。最近では柳田康雄の編年（柳田1991），および井上裕弘の編年（井上1991）が代表的なものであろう。

また，蒲原宏行は佐賀平野の出土資料を中心とした編年案を提示している(蒲原1991)。蒲原の編年案は，本遺跡が位置する有明海西部地域の古式土師器を検討するうえできわめて有効な編年案と考えられる。

（3）　長崎県における古式土師器研究史抄

長崎県における古式土師器研究の嚆矢となったのは，宮崎貴夫の大村市大堂遺跡出土土器の報告である（宮崎1979)。宮崎は大堂遺跡出土土師器を「殆どは5世紀代を中心とする時期」としながらも，出土土器を一括資料と認定し，出土土器を「土器相により庄内式から布留式の古相の段階」に位置づけた。さらに秀島貞康は県内出土土師器の変遷を「大堂遺跡Ⅰ類・平山遺跡Ｂ地点遺跡Ⅰ類→平山遺跡Ｂ地点・大村市黒丸遺跡の主体をなす一群→黄金山古墳出土土器群→大堂遺跡の新相を示す一群」と予察した（秀島1981)。

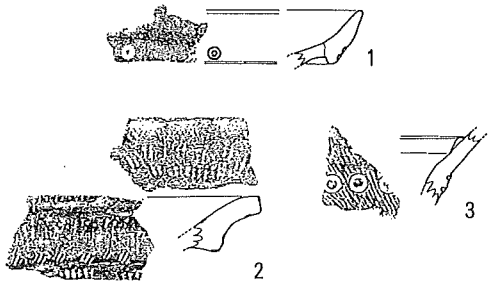
その後，宮崎は南高来郡有家町堂崎遺跡の報文のなかで，秀島の変遷の見通しを検討し，「大要については間違いない」としたうえで，黒丸遺跡出土土器群については出土状況から一括資料としてとらえられないと指摘した。さらに宮崎は福江市橘遺跡（小田1979）出土資料などを援用し，秀島の変遷見通しに補足をおこない「橘Ⅰ地点・平山ＢⅠ類（庄内式段階）→平山ＢⅡ・Ⅲ類（布留式古相）→黄金山古墳・黒丸遺跡→大堂遺跡」とした（宮崎1982)。

その後，本県でも少ないながら古式土師器の資料は増えているが[註2]，分析的な論攷としては，80年代初めの宮崎・秀島の仕事を最後に，その後途絶えているのが現状である。

⑧　有明海西部地域の古式土師器

（１）　古式土師器の分類

本来ならば，有明海西部地域から出土する古式土師器の形式分類から行うべきであるが，先述のごとく，本県では古式土師器の出土量が少なく，また完形品はなおさら少ない状況で，地域内出土資料のみで形式分類を行うことは困難である[註3]。したがってここでは，先述の井上，柳田，蒲原編年の形式分類のうち，主に壷形土器および甕形土器の形式分類を援用し，当該地域の古式土師器を概観したい[註4]。



第25図　今福遺跡出土土器（１）と西ノ角遺跡出土土器（２，３）（Ｓ＝１／４）

（２）　稗田原遺跡住居跡出土の古式土師器の形式分類

先に遺物の項で本遺跡住居跡から出土した土師器の分類を行ったが，ここでは個々の形式について検討したい。

甕Ⅰ類（第24図１～２）は布留式系甕の新しい段階[註5]で，資料中に布留式系甕の古い段階の資料はみられない。

甕Ⅱ類（第24図７～13）は柳田のいう布留系直後型式の甕である。高杯は井上の高杯Ｐ形式，柳田の高杯Ａ類，蒲原の高杯Ｇ類とみられるが，当該地域におけるこの種の高杯の型式変遷は現状ではわからない。器台は外来系ものものであるが，小片のため詳細はわからない。

（３）　有明海西部の古式土師器出土遺跡および出土土器の検討

ここでは当該地域における古式土師器出土遺跡資料の検討をおこなう。

①　南高来郡北有馬町今福遺跡Ｂ地区１号溝最新相およびＣ地区竪穴住居跡出土資料（南高来郡北有馬町今福）（宮崎1986）（第25図１～５）

遺跡は島原半島の南東に位置する北有馬町に所在し，町内を流れる有馬川河口北岸の標高10～30mの河岸段丘上に立地する。1978年（昭和53）から1981年（昭和56）にかけて県道の改良工事にともない，県教委が発掘した。古墳時代の遺構としては竪穴住居跡，環濠などが出土している。古式土師器はＢ地区１号溝およびＣ地区竪穴住居跡から出土している。甕形土器は在地系の台付甕である。壷形土器は畿内系の二重口縁の資料が出土している（第25図１）。この壷の施文は竹管状の円形圧痕文で，この種の壷でも新相であろう。高杯も弥生後期の系譜を引く在地系の高杯である。

②　諫早市平山遺跡Ｂ地点遺跡出土資料（諫早市栗面町）（秀島1981）（第26図１～５）

遺跡は諫早平野の南に位置する標高約50mの丘陵上に立地する。1979年（昭和54年）に小学校建設にともない諫早市教委が発掘調査をおこなった。遺構は存在しなかったが，包含層中に古式土師器の集中地点が数カ所検出された。甕形土器は在地系の台付甕（第26図５）[註6]に加えて，布留式系甕の古段階の資料がみられる（第26図１）。しかし主体は布留式系甕の影響をうけた在地の土器である（第26図２）。すなわち，口頸部の立ち上がりや，口縁部の形状に布留式系甕の影響がうかがえるものの，

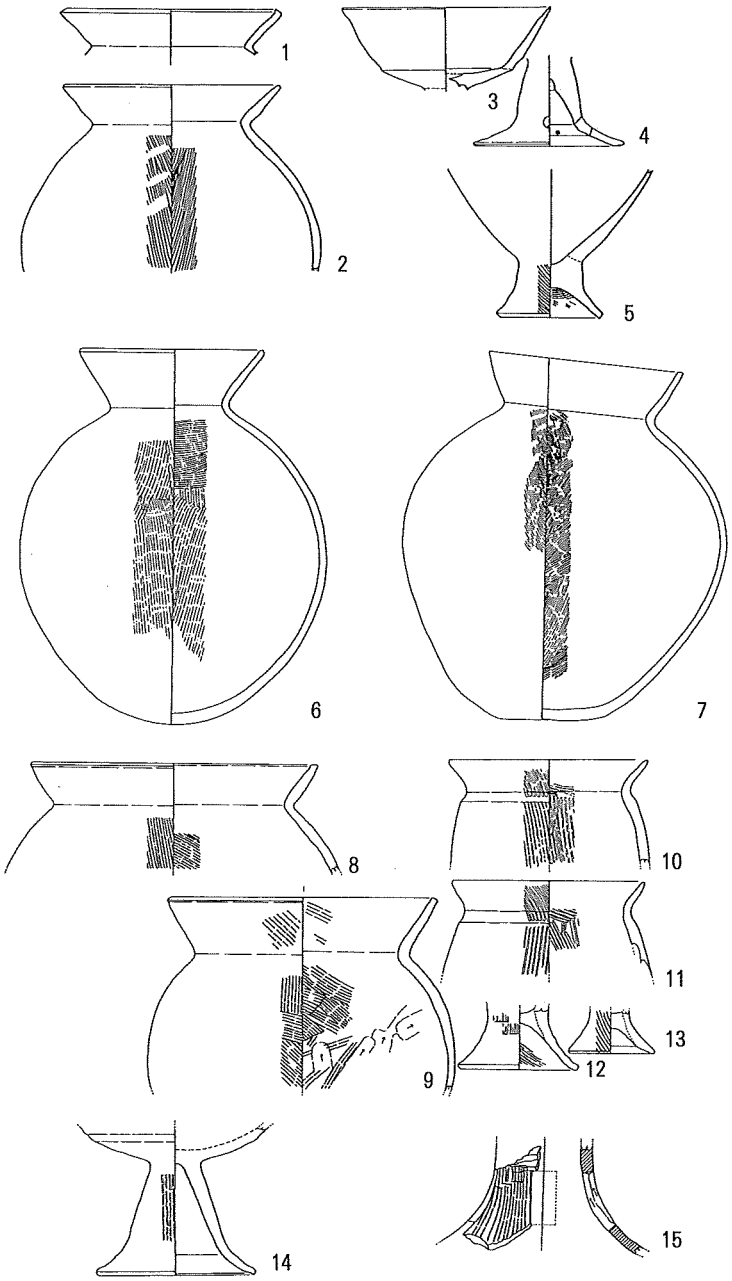
調整は胴部内面がハケ調整でヘラケズリが定着していないなど，布留式系甕とは趣を異にするものである。高杯は杯部が深く，一部に脚柱部が中実のものがみられるなど，古相を呈する。

③　諫早市小野曽屋遺跡第Ⅳ層出土資料(諫早市長野町字曽屋)（川瀬・古賀1995）（第26図６～15）

遺跡は諫早平野の西部に位置し，有明海湾奥の泥質地に立地する。遺構としては近世の畦畔や，弥生時代終末から古墳時代初頭の杭列が出土している。古式土師器は包含層中に廃棄された状態で出土した。壷形土器は二重口縁のものと，直口縁の壷（第26図６，７）がある。直口縁の壷形土器は内面をハケで調整している。布留式系甕はみられず，いずれも布留式系甕の影響をうけた地域色の強い甕が存在する(第26図８)。第26図９は台付甕で[註7]，胴部内面はハケを施したのちに下半をヘラケズリしている。高杯形土器は平山遺跡のものと比較すると杯部が浅い。器台は長方形の透かしがあり，弥生後期土器の系譜を引く在地系の器台である（第26図15)。

④　大村市稗田遺跡第３，４号住居跡出土資料（大村市弥勒寺町）（稲富・橋本1988）

遺跡は大村平野の北部を流れる郡川の下流に位置する標高18mの丘陵上に立地する。1986年（昭和61）に農業構造基盤整備事業にともなって大村市教委によって調査が実施された。古墳時代の遺構としては，竪穴住居跡が重複して出土した。古式土師器は３，４号住居跡の覆土より出土している。覆土中の資料ではあるが，報告者によると一部の壷，甕，鉢は「ほぼ完形状態で投入されたか，置かれた状況で出土した」ということで，このような出土状況であれば一括資料として扱えるのではないかと考える。壷形土器は二重口縁壷で口縁部外面の屈曲部が突帯状になし



第26図　平山遺跡Ｂ地点出土土器（１～５）と小野曽屋遺跡出土土器（６～15）（Ｓ＝１／６）

ており古相である。布留式系甕はみられない。甕の内面調整にヘラケズリが確認できたのは実見した限りでは，１例のみで，胴部下半にみられた[註8]。

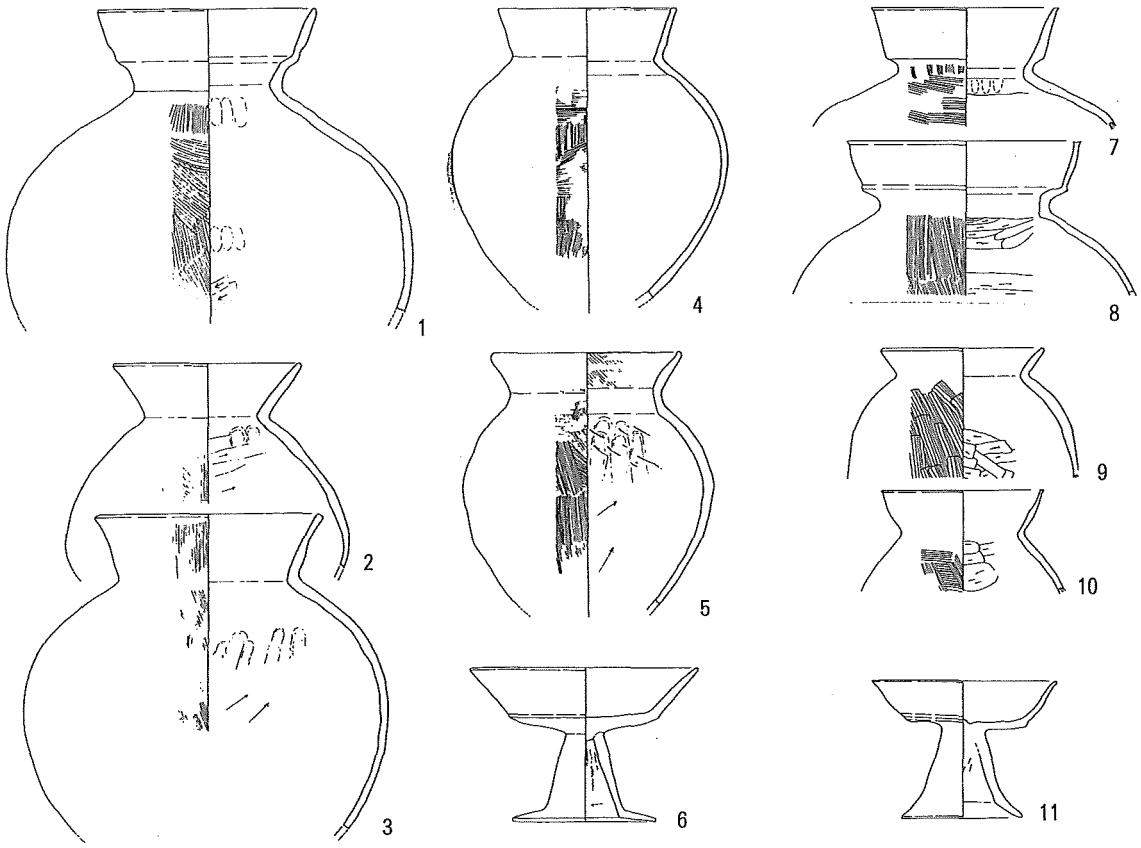
⑤　大村市黒丸遺跡河川出土資料（大村市黒丸町）（稲富1980）（第27図１～６）

遺跡は大村市の西に位置し，市を流れる郡川が形成した扇状地上に立地する。1977年（昭和52）都市下水路工事中に発見され，大村市教委によって調査された。古式土師器は旧河川から出土した。出土状況から，良好な一括資料とはいいがたい。壺形土器は二重口縁の壺形土器（第27図１）と直口縁の壺形土器がある（２，３）。甕形土器に布留式系甕は含まれず，いずれも柳田の布留系直後型式の甕が主体となっている（４，５）。また口縁部が丸く外湾する甕も存在する。後者の資料は時期的に降るものとみられる。

高杯は小野曽屋遺跡出土資料と同形式のものが存在する。器台や低脚高杯は甕形土器と比べると様式的に古相を呈するものを含んでいるようで，布留式系甕盛期のものが含まれており，布留系直後型式甕を主体とする黒丸遺跡の煮沸形態の甕形土器との間で様式差が存在するようである。資料が旧河川からの出土ということもあり，今回は黒丸遺跡出土資料として，甕形土器と壺形土器のみを使用したい[註9]。

⑥　南高来郡国見町上篠原遺跡（南高来郡国見町土黒上篠原）（諫見・内山1988）（第27図７～11）

遺跡は島原半島北部に位置する国見町北部の標高30ｍの台地に立地する。1985年（昭和60）に県立

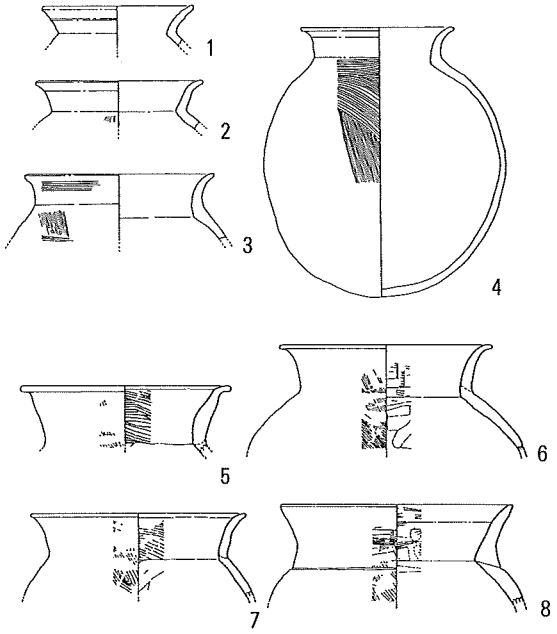


第27図　黒丸遺跡出土土器（１～６）と上篠原遺跡出土土器（７～11）
（Ｓ＝１／６）

国見高校考古学研究部によって発掘された。竪穴住居跡と柱穴，炉跡などが出土している[註10]。

出土土器には壷，小形丸底壷，甕，高杯，鉢がある。壷は二重口縁の新しい段階のものである。甕には布留式系甕はみられず，布留系直後型式で占められる。高杯は小野曽屋遺跡，黒丸遺跡出土のものとは異なり，脚部がスカート状に開き，杯底部が水平になるものである(第27図11)。報告者はこれらの土師器を「北部九州では松木遺跡のV期に，また，対岸の熊本では，塚原古墳群出土土器にほぼ並行すると考えられよう。」としている。

⑦　北高来郡高来町上田井原遺跡出土資料（北高来郡高来町小江峯名上田井原）(村川1993)（第28図１～４）



第28図　上田井原遺跡出土土器（１～４）（S＝１／８）と大堂遺跡出土土器（５～８）（S＝１／６）

遺跡は佐賀・長崎両県の県境にそびえる多良岳の南麓に位置する高来町の南部にある。町内を流れる小江川の沖積地に立地し，標高は６～13mである。1991年（平成３）に農業基盤整備事業にともない高来町教委と県教委が調査をおこなった。古式土師器は数カ所の土器廃棄跡から出土している[註11]。そのうち，量的には第４，５，11集中地点から多くの資料が出土したようである。しかし第４集中地点には弥生後期土器の甕形土器が含まれているほか，古式土師器は，布留系直後型式の甕と口縁部が丸く外湾する甕があり，時間幅をもつようである。第５集中地点も資料が高杯に片寄り，偏在性は否めない。したがって，第11集中地点のみが資料的に比較的まとまっているようである。甕は口縁部が丸く外湾するものが主体である。

⑧　大村市大堂遺跡（大村市皆同郷大堂）(宮崎1979)（第28図５～８）

遺跡は大村平野の北部を流れる郡川下流にある。付近は標高３m前後の沖積地で，遺跡の近くをＪＲ大村線が走る。調査は圃場整備事業にともない，1976年（昭和51）に県教委が実施した。遺構の出土はなく，古式土師器は遺物包含層からの出土である。甕，小形丸底壷，鉢が出土している。甕形土器は布留式系甕の古段階のものと，口縁部が丸く外湾するものとがみられる。前者は除けば同一時期の資料とみられる。

（４）　有明海西部の古式土師器の変遷

ここでは，当該地域の古式土師器の変遷を主に甕形土器を中心にまとめてみたい。古式土師器の段階を下記のとおりⅠ～Ⅵ期に分けることとした。

第Ⅰ期は在地系土器のなかに少数の庄内式系土器の要素がうかがえる時期とする。本県では明確な庄内式甕は確認されていない。しかし北有馬町今福遺跡Ｂ地区１号溝最新相資料には庄内式系の二重口縁壷が出土しており，当該期の資料と考えられる。また北高郡森山町西ノ角遺跡第２層出土土器の

なかにも当該期の資料がみられる（第25図２，３）[註12]。

第II期は布留式系土器の影響がうかがえる時期である。諫早市平山遺跡Ｂ地点出土資料，諫早市小野曽屋遺跡IV層出土資料，大村市稗田遺跡３・４号住居跡出土資料が当該期と考えられる。また南高来郡国見町百花台遺跡出土資料も同時期とみられる[註13]。布留式系甕の古段階がわずかに出土する遺跡である。しかしそれと共伴する甕形土器は，口縁部の形態や器形に布留式系甕の影響がうかがえるものの，内面の調整がハケであったり，長胴傾向をみせるなど地域色の強いものである。壷は二重口縁のものと，直口縁のものがある。直口縁の壷形土器は内面調整が地域色の強い甕と同様にハケ調整である。またこの時期まで在地系の台付甕が残存している。さらに長方形の透かしのある弥生後期からの系譜をもつ在地系器台も残存する。

第III期は，布留式系甕の新段階の土器が主体を占める時期と推定されるが，現在までのところ，良好な資料が発見されていない。

第IV期は本遺跡住居跡出土資料があげられる。布留式系甕の新段階のものは減少し，布留系直後型式が主体を占める時期と考えられる。在地系の台付甕はこの時期には消滅しており，甕形土器の内面調整はヘラケズリが定着するとみられる。II期の甕の内面ヘラケズリは胴部下半にとどまっていたが，このIV期になると口頸部の内面屈曲部付近に及んでくる。

第Ｖ期は大村市黒丸遺跡出土資料や国見町上篠原遺跡出土資料などがあげられる。布留式系甕は消滅しており，布留系直後型式の甕が主体となる。黒丸遺跡では甕形土器に口縁部が外湾するものがみられ，黒丸遺跡出土の甕形土器の一部は次のVI期に属する可能性がある。

第VI期は上田井原遺跡第11土器集中地点出土資料や，大村市大堂遺跡出土資料の主体を占める土師器があげられる。外湾口縁の甕形土器が主体を占める時期で，二重口縁壷は消滅している。この時期には，定型化した須恵器が出現していたものと考えられる。

（５）まとめ

稗田原遺跡の住居跡から出土した古式土師器は布留式系甕の新しい時期のものをわずかに含み，布留系直後型式の甕が主体となる段階とみられる。当該地域の時期区分では第IV期に該当しよう。最後に第IV期の編年的位置であるが，大略，井上編年の古墳前期５式，柳田編年のIIIａ式に該当する土器群と思われる。

〔註〕

註１　有明海西部地域とは本来，橘湾沿岸を除く島原半島，および北高来郡に限定されるべきであろうが，今回はこの地域の考古資料と近縁性をもつ諫早市，大村市の資料も加えて検討したい。

註２　1984年（昭和59）には北松浦郡小佐々町の古田遺跡が調査され，包含層中から布留式系の古式土師器が出土している（町田1985）。1986年（昭和61）には壱岐郡勝本町片苗イシロ遺跡を九州大学考古学研究室が調査し，竪穴住居跡から布留式併行期の土師器が出土している（平川1987）。また1987年（昭和62）には松浦市宮ノ下り（みやのさがり）遺跡で布留式古段階の住居跡が２棟発見された（中田

1989)。さらに1989年（平成元）には壱岐郡勝本町の串山ミルメ浦遺跡から布留式古段階の資料が出土した(安楽・町田1989)。

註3　当該地域の古式土師器の時期区分は資料的な制約から，はなはだ雑ぱくなものにしかならない。したがって資料が蓄積されるまで待つべきだと言う意見もあろう。しかし県内の学史において見たごとく，80年代前半の宮崎・秀島の総括以降，すでに15年近くの時間が経過している。本遺跡で一括資料を得たということに勢いを得て，現状の資料を集成することもなんらかの意味があろうと考えた。

註4　布留系直後型式については，柳田の編年に従った（柳田1991)。

註5　ここでいう布留式系甕とは，井上の甕E型式，柳田の甕C類，蒲原の甕E類c型式のことである。この甕の新旧相について井上は「E1型式は扁球形の胴部に，く字状に強く外反した口縁がつく甕で，口縁端部を内側につまみだしている。胴部内面ヘラ削り，外面刷毛調整で，外面肩部の横位の刷毛調整が特徴で，しばしば沈線文・櫛目波状文・刺突文などが施される。E2形式は口縁部を肥厚して内湾する一群の甕で，新しくなるほど内湾度を増し，胴部の球形化も進む傾向がある。E1形式は古墳前期1式を特徴づける形式で，E2形式は古墳前期1式に出現し，5式まで盛行する。」という（井上1991)。柳田は「古相では，外反した口縁部に多少丸味がでて，端部内側をつまみ上げる。胴部は内面ヘラケズリで器肉が薄く，外面肩部の横方向のハケメ調整が特徴で，波状沈線文や刺突文なども施される。(中略)新相のC類甕は，口縁部の内湾化と直立が進み，胴部の球形化と器肉の厚さを増してくる。口縁端の形態も，内側つまみ上げ→水平化→内傾化が進み，内傾化と同時に内側に丸く突出するようになり，近畿の最盛期の布留甕と同形態となり終焉を迎える。」という(柳田1991)。蒲原は畿内系精製甕（E類）のうちc型式（布留型）とし，さらにc1，c2，c3型式に分類した。「c1型式はなで肩の球形ないし，倒卵形の胴部を持ち，つくりが丁寧で，全体に均整がとれている。器壁も薄い。肩部に定形化したカキメ状ヨコハケを施し，波状文や直線文を持つものも多い。c2型式は胴部下半が間のびして長胴化するとともに厚手づくりとなり，特に底部付近が鈍重な感じとなる。波状文は見られない。c3型式は口頸部が立ち気味で，全体にc2型式よりさらに厚手づくりである。肩部のカキ目状ヨコハケや直線文はまれで」，c1→c2→c3と型式変化を遂げるという（蒲原1991)。

註6　平山遺跡B地点の台付甕は報文の第20図の2と9が組み合うと考えていたが，実見の結果，両者は胎土や焼成が異なっていた。しかし同遺跡に台付甕が存在することは確実である。

註7　小野曽屋遺跡の台付甕は，胎土や技法・焼成などから第26図9と12が組合い，小形の10・11と脚台13が組合うことが理解できた。平山遺跡B地点出土資料および小野曽屋遺跡出土資料については，諫早市教委の秀島貞康氏・古賀力氏に実見の便宜を図っていただき，様々な助言をえた。記して感謝する。

註8　報文第30図12の甕は実測図をみると口唇部をつまみ上げたような印象をうけるが，実見したところ，口縁部は若干内湾するが，口唇部はまっすぐのびて，最後は丸くおさめるものである。

註9　稗田遺跡出土資料や黒丸遺跡の出土資料については大村市教委の稲富裕和氏に実見の便宜を図っていただき，様々な助言をえた。記して感謝する。

註10　報告書に掲載された竪穴住居跡の遺物分布状況と古式土師器との実測図の番号が一致しないため，個々の土器がどこから出土したのか，はっきりとしたことはわからないが，竪穴住居跡の覆土から出土とみられる。また出土した陶質土器と古式土師器との共伴関係も報告書を読む限り定かではない。いずれにしても竪穴住居跡に廃棄された遺物群とみられる。

註11　報告書に掲載された個々の土師器の解説がなく，一覧表も簡単で，実測図も稚拙であるため，成形技法や調整法などの検討ができないのは惜しまれる。

註12　宮崎貴夫によりⅧ期と編年された資料に庄内式系の二重口縁壷（報文のFig30-1・2)，同有段高杯（報文のFig35-7)がみられる。

註13　報文のFig136-4の資料は，口縁端部を上方につまみあげ，布留式系古段階の甕の特徴をもつが，内面調整は細かいハケ調整であり，布留式系甕とは異なる。

〔引用・参考文献〕

安楽勉・町田利幸編1989『串山ミルメ浦遺跡－第二次調査報告－』（勝本町文化財調査報告書第７集）勝本町教育委員会

諫見富士郎・内山泰紀編1988『上篠原遺跡概要報告書』長崎県立国見高等学校考古学研究部

稲富裕和・橋本幸男編1988『稗田遺跡－弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書－』長崎県大村市・稗田遺跡調査会

稲富裕和編1980『黒丸遺跡－長崎県大村市黒丸町所在黒丸遺跡の調査報告』長崎県大村市・黒丸遺跡調査会

井上裕弘1991「北部九州における古墳時代出現期の土器群とその背景」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集　児嶋隆人先生喜寿記念事業会

小田富士雄1979「橘遺跡」『弥生系高地性集落の研究』学生社

蒲原宏行1991「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第16集　佐賀県立博物館・美術館

川瀬雄一・古賀力編1995『小野曽屋遺跡　県営水田営農活性化排水対策特別事業（松崎東地区）に伴う発掘調査報告書』長崎県諫早市埋蔵文化財調査協議会

佐々木隆彦1980「結語」『今光遺跡・地余遺跡』東急不動産株式会社

佐々木隆彦1984「松木遺跡群出土土器の展開」『松木遺跡Ｉ』（那珂川町文化財調査報告書第11集）那珂川町教育委員会

中田敦之編1989『宮ノ下遺跡』（松浦市文化財調査報告書第５集）松浦市教育委員会

秀島貞康編1981『平山遺跡Ｂ地点－みはる台小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』長崎県諫早市教育委員会

町田利幸・安楽勉編1985『古田遺跡』（小佐々町文化財調査報告書第１集）小佐々町教育委員会

平川敬治編1987『片苗イシロ遺跡』（勝本町文化財調査報告書第５集）長崎県勝本町教育委員会

宮崎貴夫1979「大堂遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報II』（長崎県文化財調査報告書第45集）長崎県教育委員会

宮崎貴夫1982「弥生時代および古墳時代・歴史時代の遺物」『堂崎遺跡－長崎県有家町所在の海中干潟遺跡－』（長崎県文化財調査報告書第58集）長崎県教育委員会

宮崎貴夫1985「西ノ角遺跡出土の土器について」『西ノ角遺跡』（長崎県文化財調査報告書第73集）長崎県教育委員会

宮崎貴夫1986「II弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡III　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第三冊』（長崎県文化財調査報告書第84集）長崎県教育委員会

宮崎貴夫1988「弥生時代～歴史時代の遺物」『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』（長崎県文化財調査報告書第92集）長崎県教育委員会

村川逸朗1993「上田井原遺跡の調査」『中江遺跡・上田井原遺跡－小江地区県営圃場整備事業にかかる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』長崎県高来町教育委員会

柳田康雄1982「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集　下巻』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

柳田康雄1991「九州」『古墳時代の研究６』雄山閣出版

(3) 3次調査

① 調査概要

今回の調査は，平成7年度道路拡幅工事区域の南側部分の調査を行った。調査区は，平成4年度調査部分と平成5年度調査部分との中間に位置する。調査区も前年度に設定した5m方眼のグリッドを延長し，続けて番号を付した。

調査は，重機による表土剝ぎを行った後，便宜上西側からA～C区に分けて西側A区から掘り下げを行った。

② 土　　層

土層は，1a層；耕作土層，1b層；赤褐色硬質土層で，パミスと思われる小礫を含む。土壌に含まれる鉄分により赤褐色を呈する。1c層；火山灰質の灰白色土層，1d層；茶褐色硬質土層で，古代の遺物包含層である。

第3次調査地点

土　　層（第29図）

第2次調査地点の土層図については，すべて北側（道路側）について土層図を作製した。基本的にはⅠ～Ⅶ層までに分類され，このうちⅠb層～Ⅱ層にかけて縄文晩期から古代・中世にかけての遺物が検出された。縄文晩期の包含層についてはⅡ層下面，Ⅲ層上面にかけて存在するものと考えられるが，古代・中世の遺物もⅡ層内で検出されるなど混在する様相を見せる状況にあった。この混在は，ひとえに上部が後世における削平等をうけていることがその要因と思われる。以下第29図と併せて土層の説明をしていきたい。

Ⅰa層：耕作土層

Ⅰb層：混礫茶褐色砂質土層（含まれる礫の大きさは径2～5㎜程のものがほとんで，火山性のパミス状のものである。古代・中世の遺物を含むが，時期の特定はできない。）

Ⅰc層：混礫暗褐色砂礫層（Ⅰb層とⅡ層との漸移層的な層で，含まれる礫は5㎜～1㎝程度である遺物はⅠb層と同様なものが出土）

Ⅰd層：茶褐色硬質土（縄文土器片を中心に遺物が出土する。）

Ⅱ層　：暗褐色硬質土（白い火山性の小礫を含む。C区では削平され，東側に一部残るのみ）

Ⅱ́層：淡褐色砂礫層（径3～5㎝程度の小礫を多量に含み，固く締まっている。SD－1に伴う層で，古代の遺物を出土する。）

Ⅲ層　：灰褐色砂質土層（A区ではⅡ層とⅣ層の漸移層として捉えたが，土質はⅣ層に近く，火山性の砂と考えられる。締まりがなく，遺物もほとんど含まない。）

Ⅳ層　：灰白色砂質土層（Ⅲ層と同様に締まりがなく，1～2㎝大の火山性の小礫を含み，火砕流堆積物と考えられる。）

Ⅴ層　：明黄褐色土層（やや粘質を持ち良く締まっている。今回遺物を含んでいなかったが，百花台

II層に比定される前期～早期の土器を含む層と考えられる。このことは，近くの畑中遺跡の土層から確認した。)

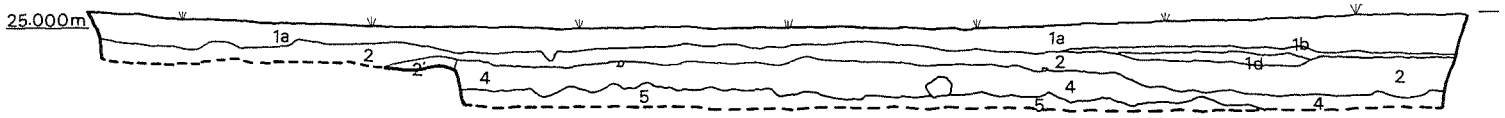
VIa層：淡黄褐色土層（V層とVIb層との漸移層である。明確な一線は引けないが，V層の黄色とVIb層の暗黒褐色土が海綿状に入り混じっている。)

VIb層：暗黒褐色硬質土層（V層よりもよく締まっており，火山性のパミス状の細粒を含む)

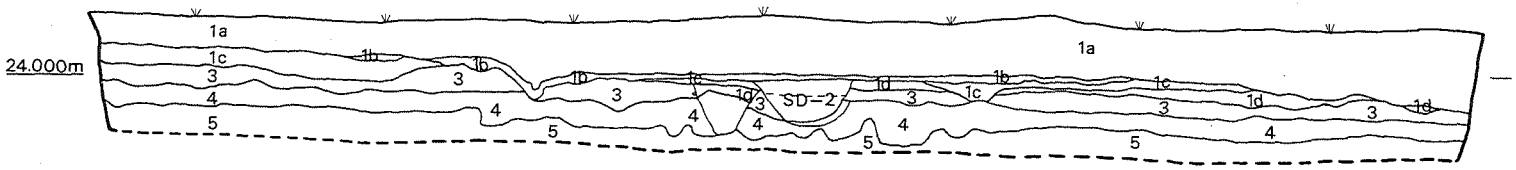
VII層　：灰黄褐色土層（5㎜大の白色の火山性小礫を多量に含む。7～8㎜大のものも散見する。）これらの層位のなかで，Ib～II層からは古代・中世の遺物と，縄文晩期の石器・土器が出土する。縄文晩期の包含層についてはII層下面～III層上面にかけてを予想している。V層については，土層説明中にも触れたように，今回島原市が同時に調査していた畑中遺跡でも検出されており，円筒形条痕文土器が出土している。この層については国見町の百花台II層，諫早市の牛込A，B遺跡のII層でも縄文の早期～前期を含む層があり，この層に比定されるものと考えられる。全体的に小さな砂礫層で構成されており，火山からの供給物と考えられる。特にIII・IV層においては顕著であり，今回遺物は検出されなかったがV層を縄文前期から早期のものとして捉えるとすれば，本遺跡では縄文中期・後期について空白となるがIII・IV層がこの時期にあたるものと考えられ，縄文中期・後期あたりに火山活動があったことが想定される。島原市の東側に位置する眉山は，普賢岳の活動による産物であるとされるが，その時期が約4000年前とされる。このことからすれば，本遺跡で中期・後期の遺物が出土しないのは，このときの火山活動がなんらかの要因であろうことが予想される。

③ 遺　　構（第？図)

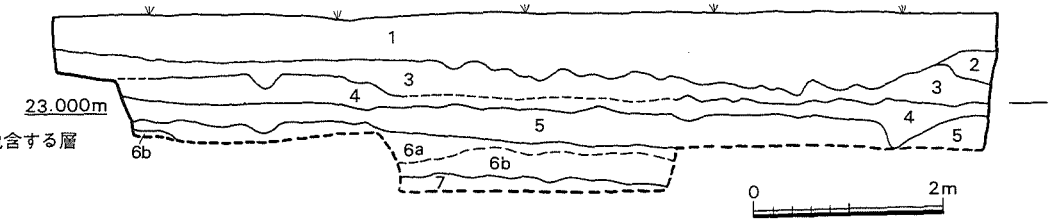
遺構としては，古代の溝状遺構2基と不明遺構がIII層面，IV層面で確認された。IV層面確認の遺構については，本来III層は無遺物であり，遺構内からも出土遺物がないため人為的なものかどうかについては不明といわざるを得ない。溝状遺構についてはA区東側隅から北西から南東に延びるものが確認された。幅60cm，深さ約10cmを測り，非常に浅いが上部が削平されたことが考えられる。充塡土は径2，3㎜～2cm程の小礫がぎっしり詰まっており，ガチガチの状態であった。遺物としては蓋坏(第31図，12）のほかに土師器の小片が出土している。このことから，ほぼ9世紀ごろの遺構として捉えられる。遺構に充塡しているガチガチの小礫については，火山灰であると考えられ，この時期になんらかのアクシデントがおこった可能性も考えられる。B区の溝状遺構（SD－2）は，Ia層除去後のIb層中で確認され，ほぼ南北に直線的に延びている。遺物としては第31図，10の土師器が出土していることから，6世紀代のものと捉えられよう。幅90cm，深さ20cmを測り，SD－1よりやや大きめであるがこの遺構も上部が削平された状態である。C区からはIII層上面（第30図）とIV層上面から多数の不明遺構が確認された。III層確認のものについては縄文晩期の可能性が高いが遺構の性格については不明である。IV層確認のものについては，シミ状に黒色あるいは，茶褐色土が確認されたが，遺物の出土はない。今回時期が特定できる遺構は溝状遺構の2基だけであり，その他多くのピットなどが検出されたが，層位的なものから考えると縄文晩期に属することも考えられるが性格などが不明



A区 土層実測図



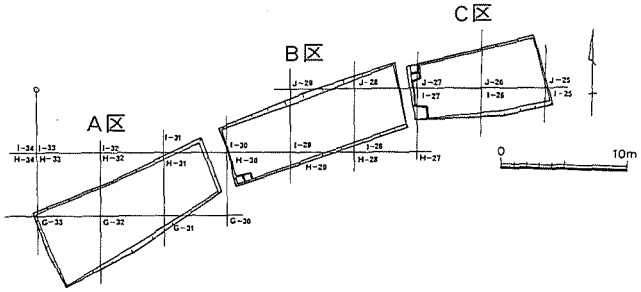
B区 土層実測図



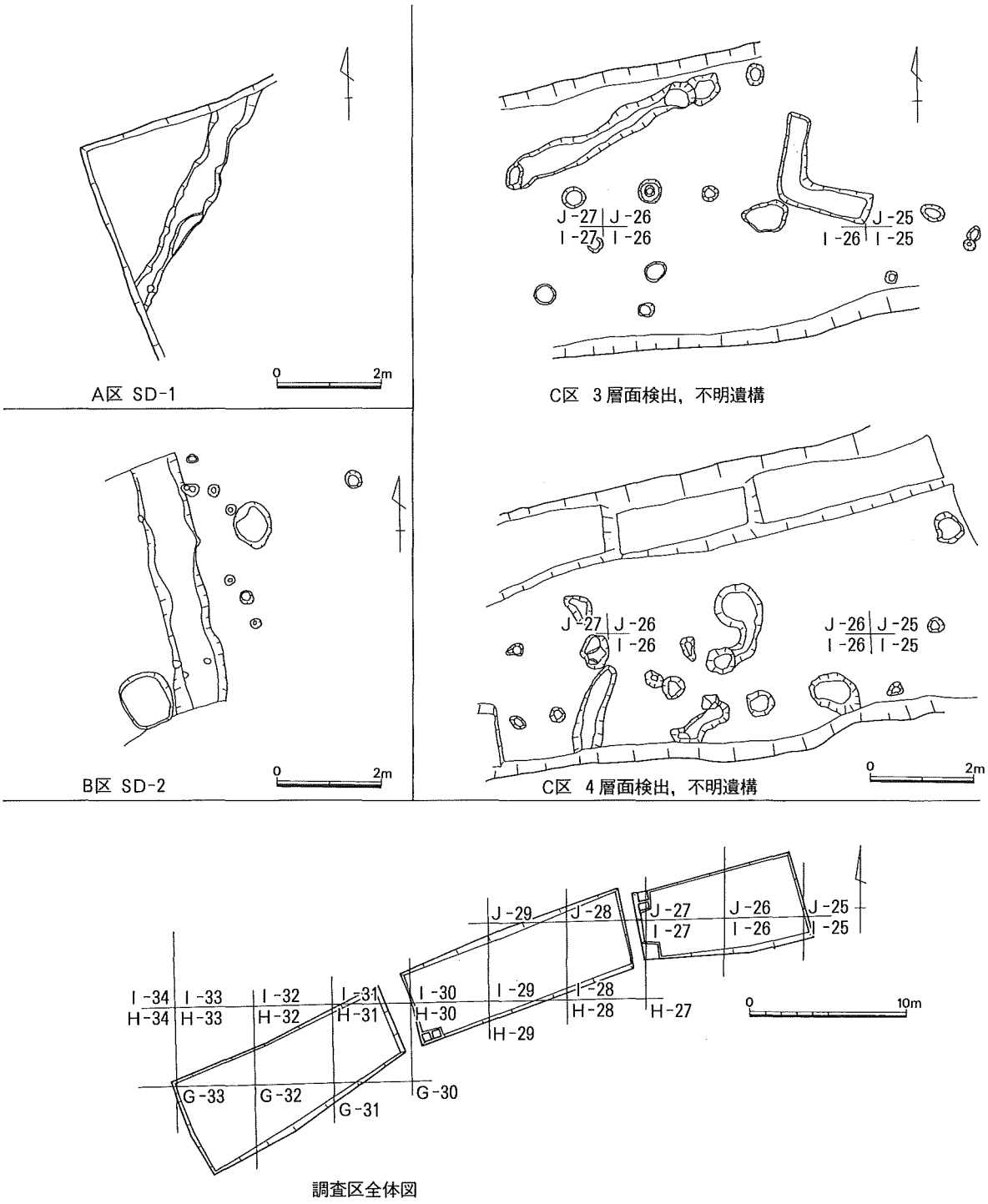
C区 土層実測図

1a層 表土層
1b層 混礫茶褐色砂質土層
1c層 灰白色砂質土層
1d層 混礫暗褐色砂質土層
2層 黒色砂質土層（古代・縄文晩期の遺物）
2′層 淡褐色砂礫層（A区のSD-1内の層で須恵・土師器が出土）
} 遺物を包含する層
3層 灰褐色砂質土層
4層 灰白色砂礫土層
5層 明黄褐色粘質土層
6a層 淡黄灰褐色土層（5層と6b層との漸位層）
6b層 暗黒褐色硬質土層（5層よりよく締まっており、火山性のパミスを含む）
7層 灰黄褐色土層（5cm大の白色の火山性小礫を多量に含む）

※Ⅱ層下面～Ⅲ層上面にかけて縄文晩期の包含層があったことが予想される。
今回遺物の出土はなかったがⅤ層については前期～早期の遺物が出土する層であることは畑中遺跡の調査例で確認されている。



第29図　3次調査地点土層図



第30図　3次調査区遺構図及び調査区全体図

であり，現在のところ不明遺構としての捉え方しかできない。調査地点を広げることにより今後なんらかの回答がでるものと考える。

④ 遺　　物（第31、32図）

土　　器

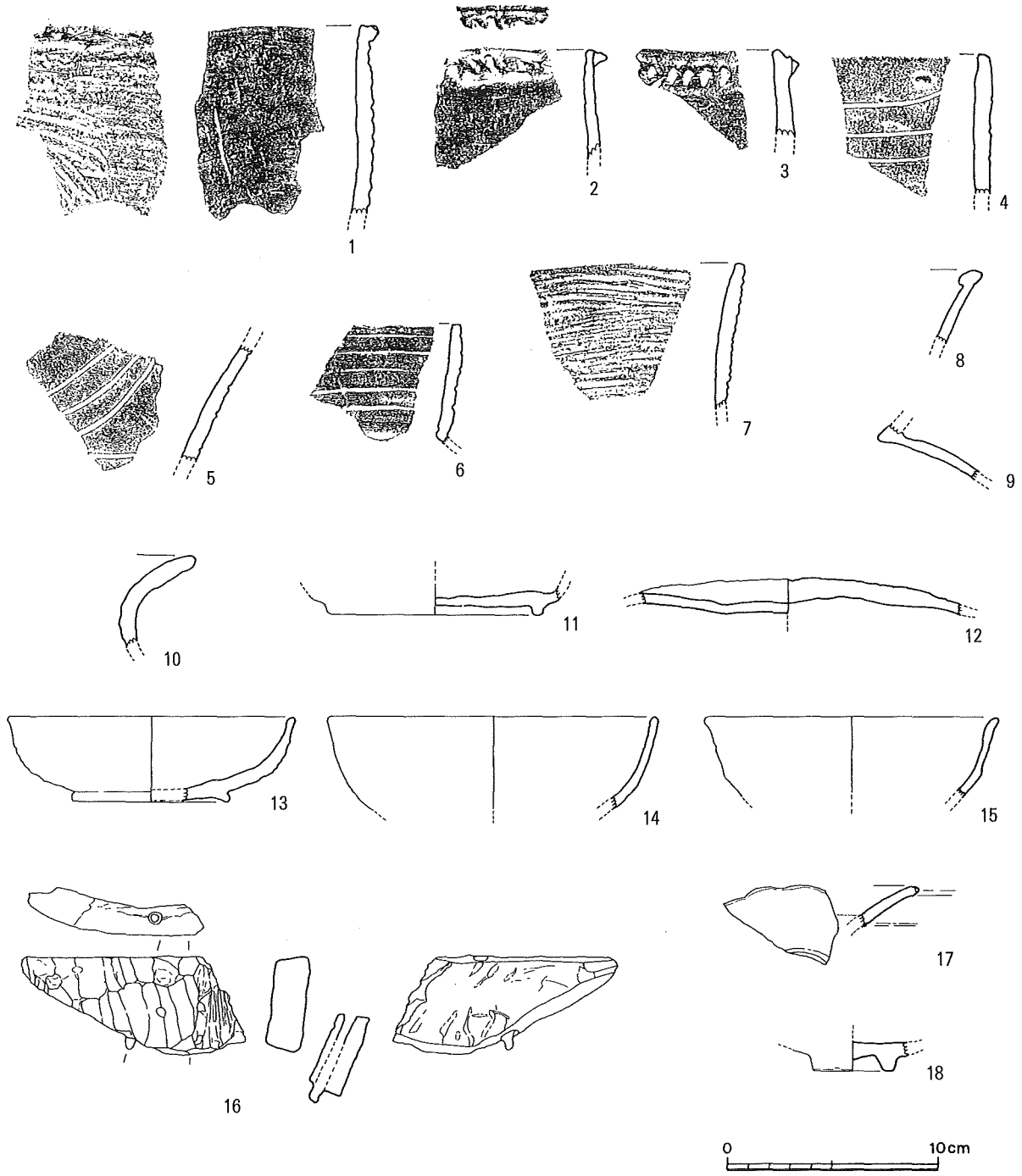
縄文晩期から古代・中世に至るまでの土器片が出土している。1は外面粗い条痕に覆われ黒褐色を呈するが，内面はヘラ状のもでのナデ調整が丁寧におこなわれ茶褐色を呈する。口唇部は平坦でナデ調整をし，外側に三角形の突帯を付ける。突帯にはヘラ状のもので細かな刻目を入れる。胴部が直線状にのびる小型の甕であろう。2は内外面ともに灰白色を呈するが，外面のほうが丁寧な調整を行う。口唇部直下にひも状の細い三角突帯を巡らせ，ヘラ状のもので鋭い刻目を入れるのが特徴である。

これに対し，3は口唇部からやや下がったところに突帯を付け，刻目も大きくなっている。1・2に比べ時期的にやや下るものであろうか。4～5については数条の沈線を単位として頸部に模様を描くもので，4・5については3本の沈線を一つの単位としている。7は器壁全体が条痕に覆われているが，内面においては丁寧な調整がなされており茶褐色を呈する。8・9は黒川期段階の精製研磨土器でどちらも浅鉢状のもの。以上のものが縄文晩期に属するもので，晩期中葉～後葉の土器群として位置づけられるものであろう。10～12については，古代の遺物をあげてみた。10はSD－2，溝状遺構出土の土師器口縁部で内面頸部直下はヘラ削りされている。口縁部はラッパ状に開くもので6世紀代のものと考えられる。SD－2は10と同一個体と思われる砕片がつまった状態であった。11は低い高台と高台が丸く作り出されることに特徴を持つ。12はSD－1出土の須恵器の杯蓋である。つまみ部はなく，天井部は低い。直径は20cm近くなる大形のものである。外面は回転ヘラ削り，内面はナデ調整をおこなう。7世紀後半以降のものと思われる。13～15は瓦器碗である。13については外面がヘラ削りを行い，碗を作った後に紐状の粘土を張り付けて高台として，高台は外側に踏ん張る。内面はヘラによる磨き調整がなされている。14は外面は丁寧なヘラ磨き，内面はナデ調整をしており内外面ともに漆黒色を呈する。15については口縁部がやや端反り気味の碗で内外面ともに漆黒色を呈す。3点ともにそれぞれに特徴をもっており時期差を表すものであろう。16は滑石製石鍋の破損に伴い再生加工を施したもので，破損部位をノミ状のもので平坦にし，そこに穴を穿ち鉄を埋め込んでいる。この鉄については，他のものとの接合した物と考えられが，接合後にも破損前と同様な機能を持ったものかについては定かではない。17は口唇部が輪花状に開く青磁皿，18は高台以外に灰緑色に釉を施したもので，李朝の青磁か。

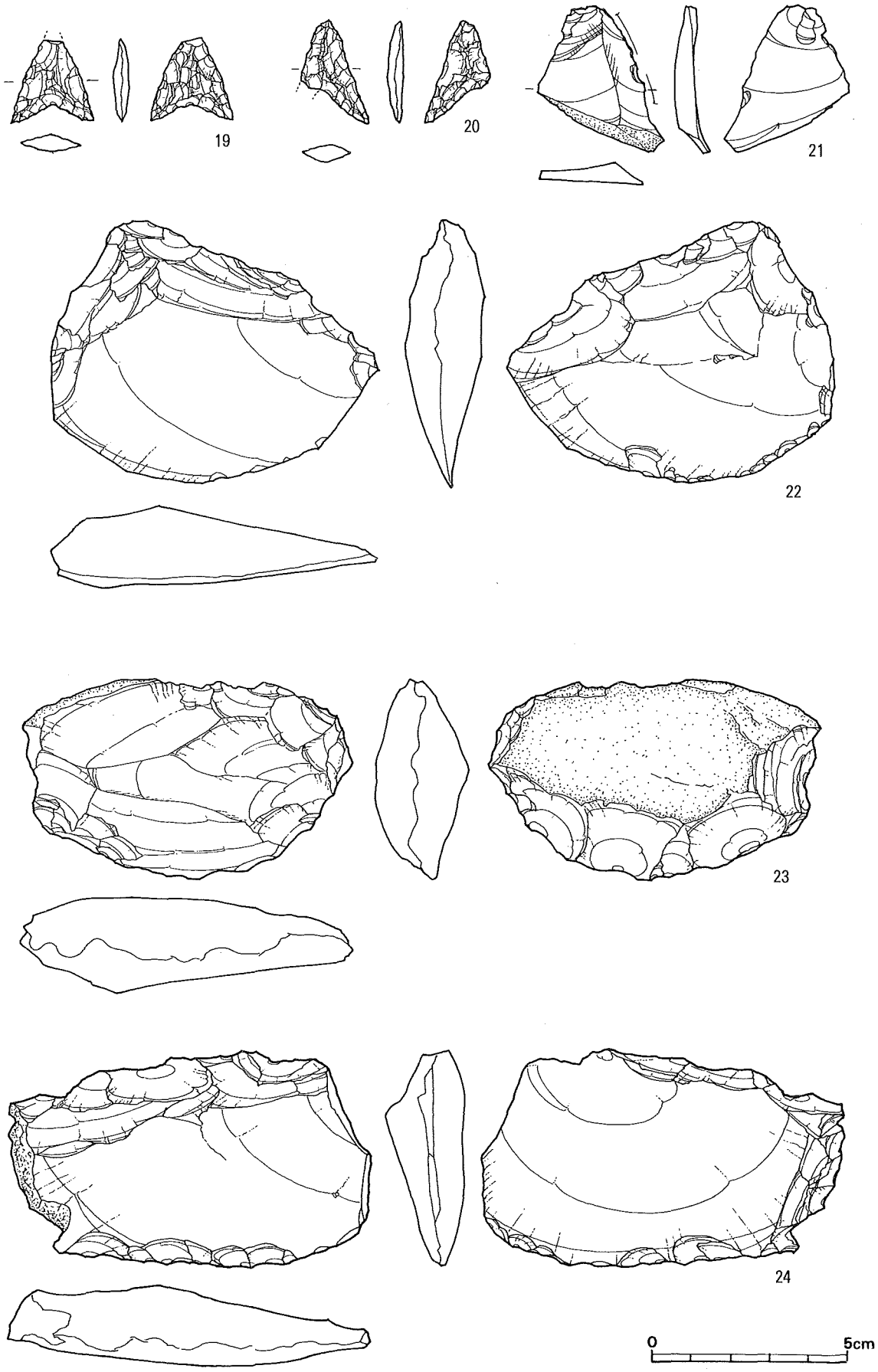
以上，本遺跡の特徴的な土器について説明したが，主体は縄文晩期の遺物であり，古代・中世の順に遺物量は少なくなる。

石　　器

石器は，安山岩製のものを主体として出土している。石鏃は3点出土しているが，2点が安山岩製1点は黒曜石を素材としている。図化したものは安山岩製のもので，脚がかなり先鋭であることに特徴をもつ。21は良質な黒曜石を使用した使用痕のある剝片である。22～24については横刃状のスクレ



第31図　3次調査地点出土の遺物



第32図　3 次調査地点出土の石器

イパーで安山岩を素材としており，横長の厚手の剝片を使用している。3点共に形状，大きさなどが共通しており，同様な使用方法があったと考えられる。このような石器については石鎌のような機能をもつと思われ，晩期の時期にこのような石器が出土する背景には，農耕などとの関連性の中で考えていかねばならないだろう。また，このような石器は中木場遺跡でも数点確認されておりこの時期の特徴として捉えられよう。

本調査地点の石器の数は少数であり，第1次調査地点の遺物の在り方から考えれば，遺跡の中心部からやや離れた部分として捉えられよう。第1次調査地点からは，本遺跡出土の土器と同様な土器が出土し，石器としては扁平打製石斧が多量に出土している。本遺跡出土の横刃状のスクレイパーの出土はみられず，場の機能を考えさせられる。本調査区における石器素材は安山岩と黒曜石に限られる。特に黒曜石については，白い不純物を含む漆黒色の黒曜石だけに限られ，針尾系の灰青色黒曜石や灰白色の黒曜石の使用はまったくない。このことは，この遺跡全体についていえることである。他の縄文晩期全体の分析にまでは至っていないが，他の遺跡についてもこの傾向が見られるようである。このような現象から，黒曜石の素材獲得のための交流は少なくなり，一ヶ所の原産地で原料を賄うという方向に落ちついた結果だと考える。このことは，頻繁に移動する形態から，定住性の強い集落を形成していき，原石の獲得に関しても，ある特定の地点との交流のなかで入手したのではないだろうか。

⑤　第3次調査のまとめ

三次調査については，遺物量そのものは少量であったが縄文晩期，古代，中世までの遺物を出土し，それぞれに成果があった。このなかで土層については幾つかの火砕流堆積物が確認され，特に縄文晩期以前，前期以降になんらかの大規模な火山性のアクシデントが発生した可能性を指摘した。このことについては，約4000年前に発生したとされる「六ツ木火砕流」との関連が予想される。このほかに晩期以降古代に至るまで数回の火砕流が発生した可能性が高いため今後さらに地質学の側面と今回の遺物の出土状況とをつき合わせてこの地区に火砕流があたえた影響を考察していかなければならないであろう。縄文時代の遺物については，晩期の単純であり，中葉～後葉の時期におかれる。縄文晩期については，島原半島において大規模な遺跡がいくつか知られており，長崎県のなかでも晩期の遺跡が豊富な地域として知られる。そのなかでも原山遺跡や山の寺梶木遺跡などにおいては，縄文農耕について問題を提示した遺跡として著名である。今回の調査地点でも，時期的に前後するが，横刃形のスクレイパーの出土に特徴的なものをみる。遺物の項で先述したように，中木場遺跡等でもこの手のスクレイパーの出土があり，この時期のスタイルとして捉えることができよう。また全体的には扁平打製石斧の出土も多く，原初的な農耕の産物としてこれらの組成を考える必要があると考える。

古代から中世の遺物については特筆すべきものはないが，瓦器碗のなかで特徴的なものがあるので触れておきたい。遺物番号13のもので，その特徴として最初に碗の部分を作り出した跡に紐状の粘土を高台として貼り付けるのであるが，高台が低く碗の底部底面と高台の接地面とが同じで，普通高台だけで体部を支えるのが碗の底部も接地するということ，高台のつくりとして幅廣の分厚い粘土紐を貼り付け，ロクロ回転により内側に引き延ばし，へたりこんだ「ハ」状を呈することである。体部に

ついてもヘラ削りによる段を明瞭に有し，内部はヘラによる磨きを入れている。器高そのもが低いことも大きな特徴といえよう。このタイプの瓦器碗は高台の作りについては瑞穂町陣の内遺跡にも見られるが，熊本県下出土の一部の瓦器椀に類似しており今後の資料の増加を待ちたい(註１)。(森1992)

註１　森隆氏が指摘した「肥後型」の瓦器椀の一部に類似したものが存在する。

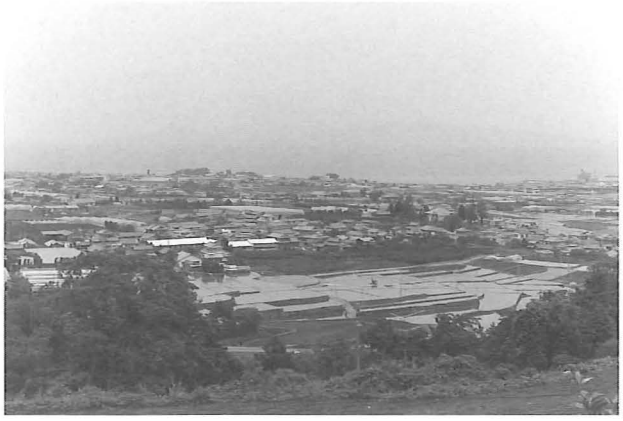
森　隆　1992「中世土器の生産にみる地域型の提唱と工人集団の系譜について」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会

Ⅳ　ま　と　め

平成４年の１次調査の時活発だった雲仙の普賢岳も，今は終息して復興の事業が順調に進んでいる。この１次～３次にわたる稗田原遺跡の調査は，今更ながらに火山活動と人間とのつきあいを考えさせられた出来事だった。この一連の発掘調査でも少なくとも縄文時代晩期以前の火砕流が確認されている。調査の結果，縄文時代晩期，古墳時代前期，古代・中世の遺物を発見した。それぞれの時期の生活の痕跡を示すものであろう。また，古墳時代前期４世紀後半の竪穴式住居跡を確認できたのも島原半島では初例ではないかと考えられる。

今後は，数次に及ぶとみられる火山活動の正確な年代の把握，縄文晩期の生産活動を解明すべく自然科学的な手法による花粉分析が必要となってこよう。今後の課題点である。

図　　版

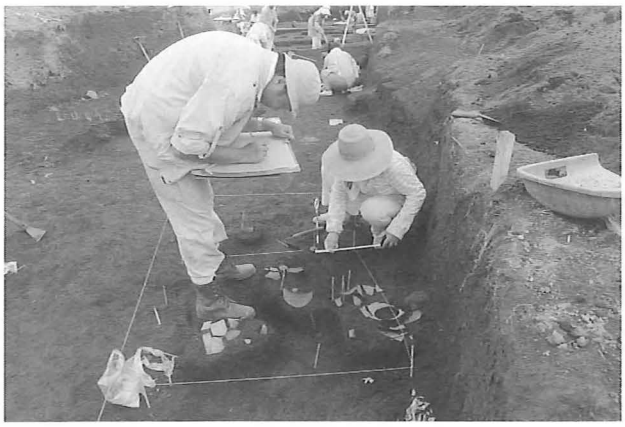


遺跡遠景

試掘調査

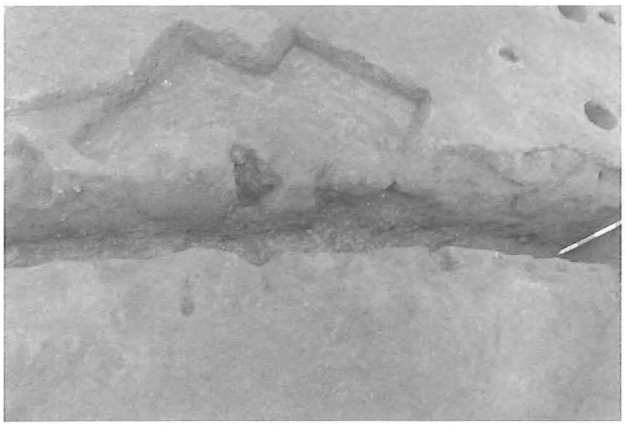
試掘状況

調査状況



実測風景

S B 1



試掘調査及び 1 次調査の状況

図版 2

調査前の状況（西から）

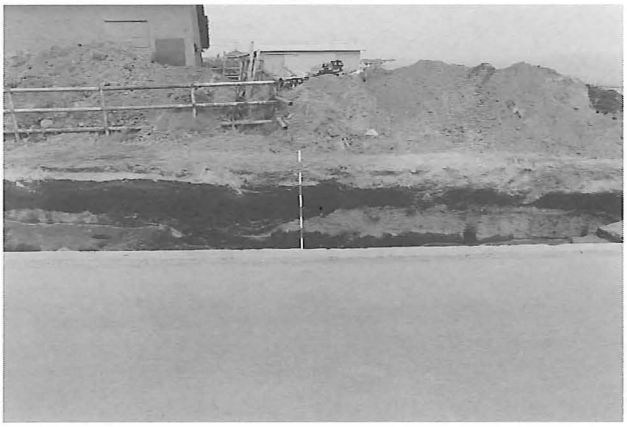
調査前の状況（東から）後方の山は活動する雲仙・普賢岳

調 査 状 況

調 査 状 況

完掘後の様子

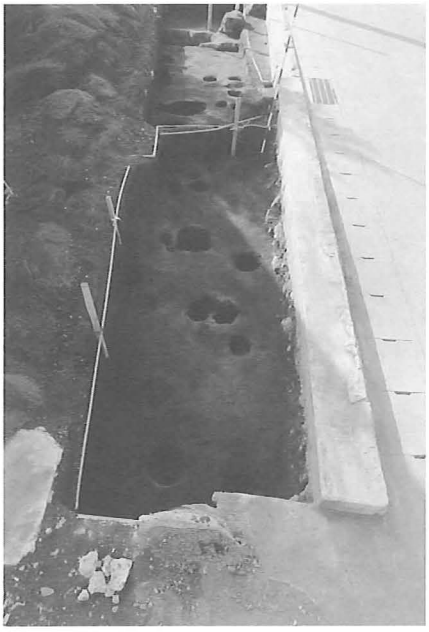
完掘後の様子

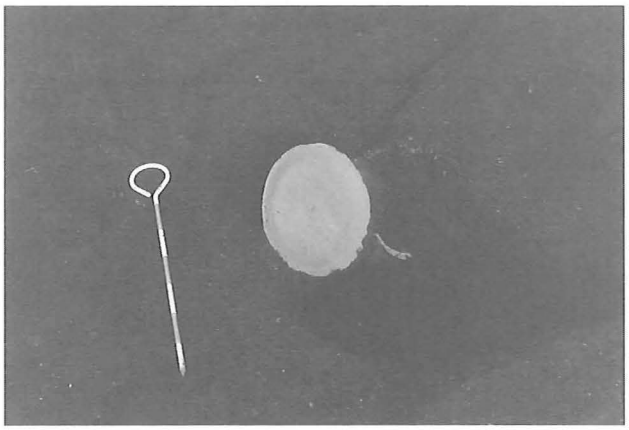


土層（白い帯状のものは火砕流）

掘立柱建物跡

2 次調査状況①





遺物出土状況

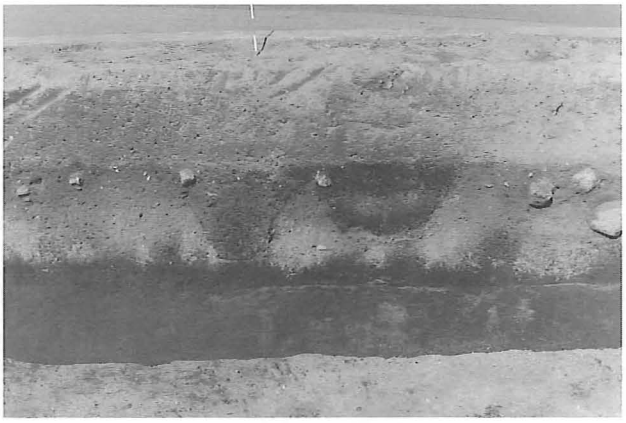
2 次調査状況②

図版 4

調査前の状況

調 査 状 況

調 査 状 況



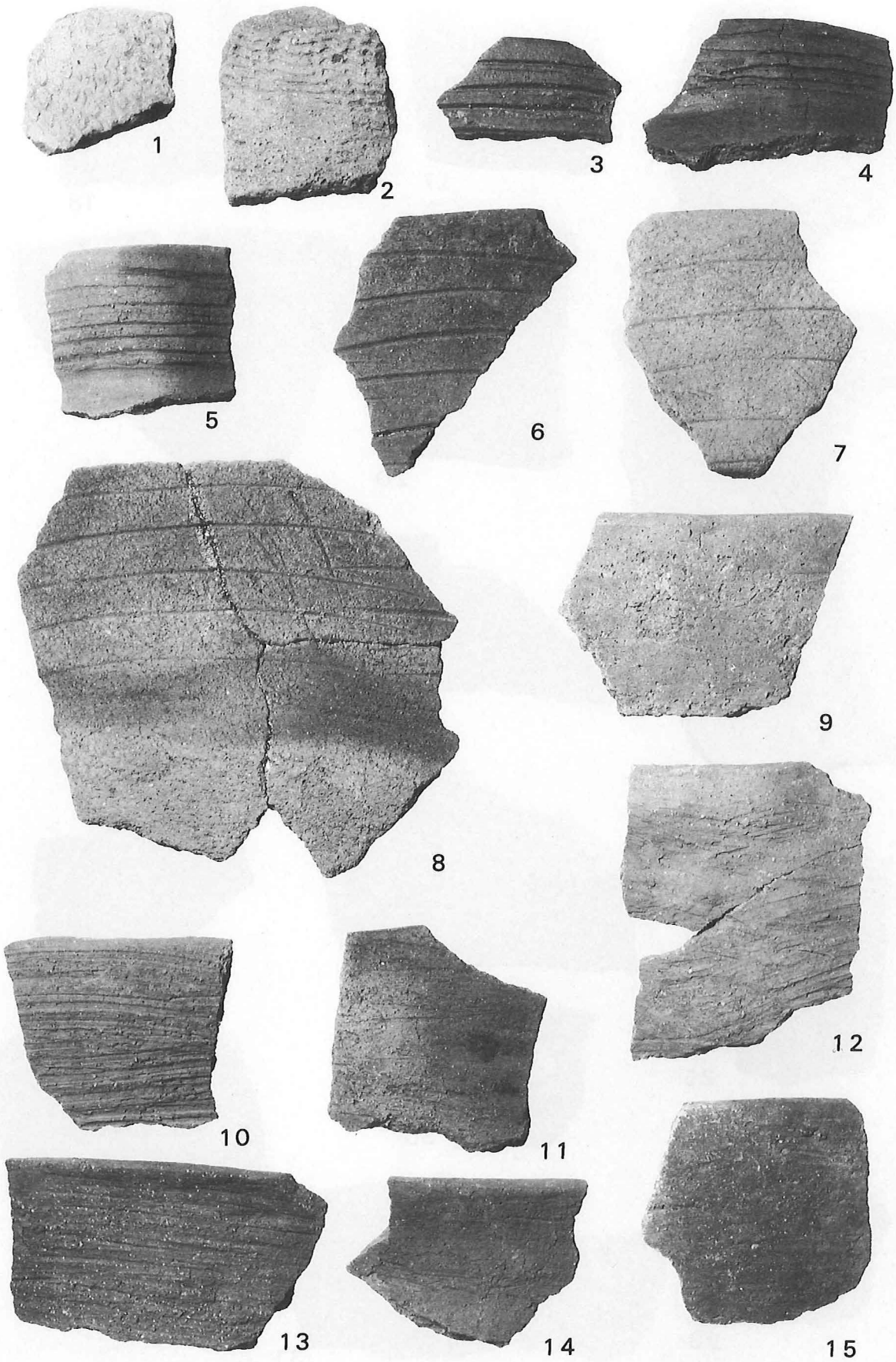
土　　層

溝検出状況

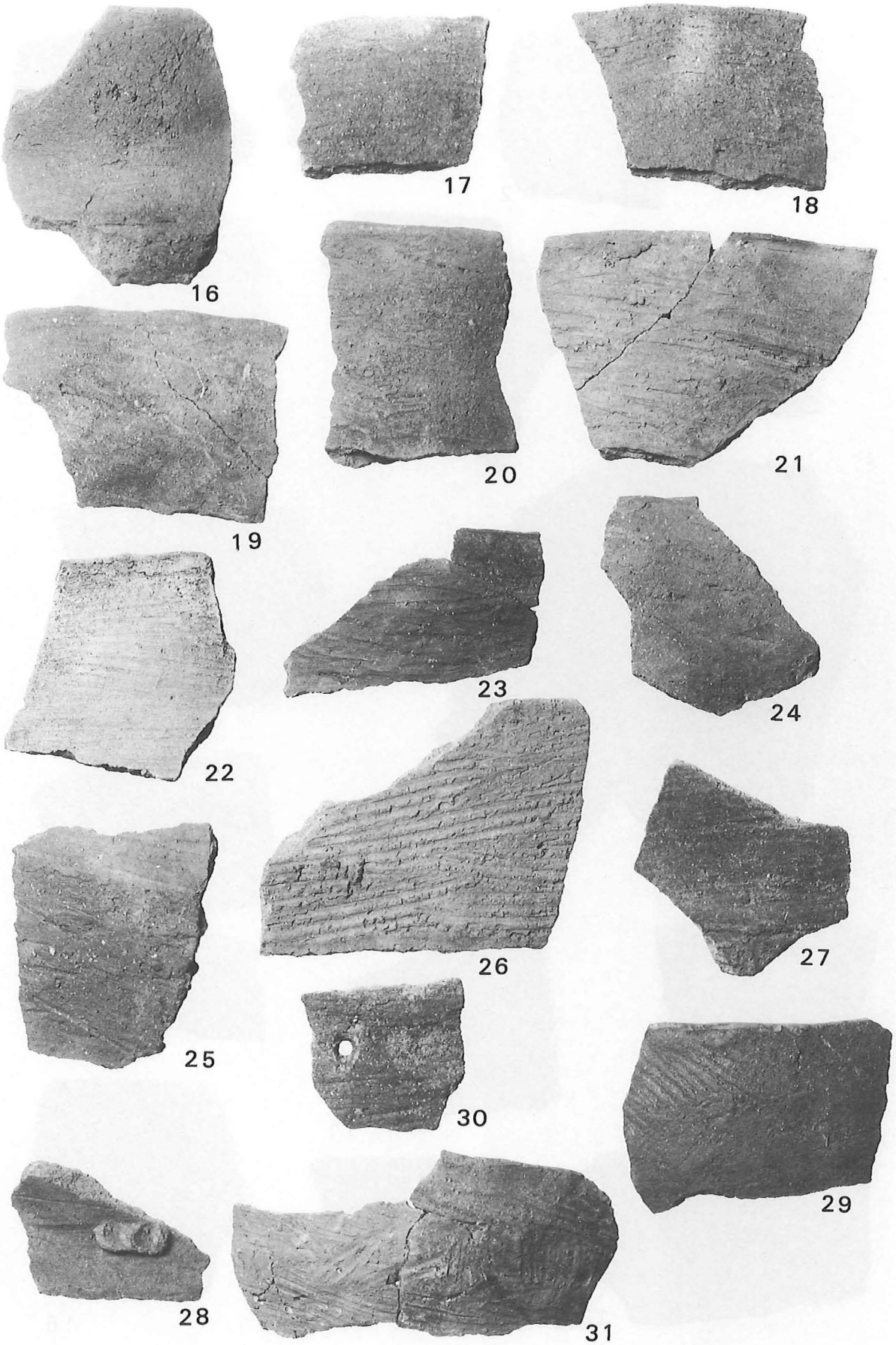
溝完掘状況

溝

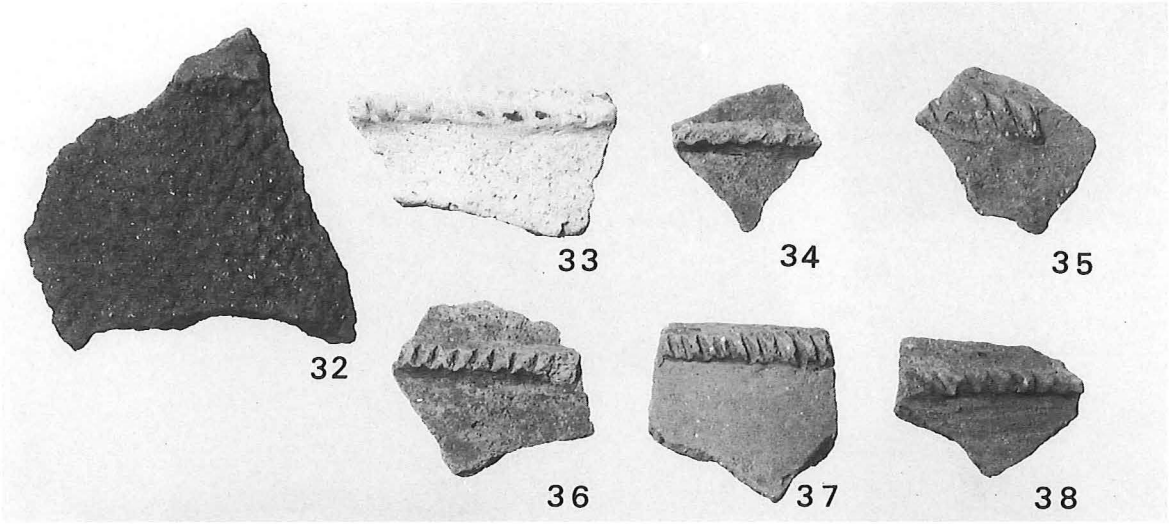
3 次調査状況

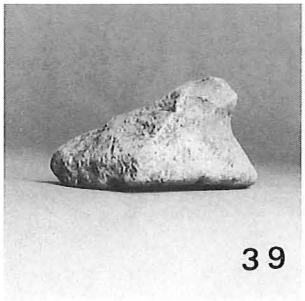


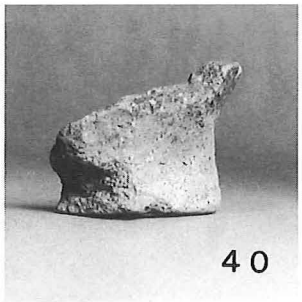
出土土器① 1／2

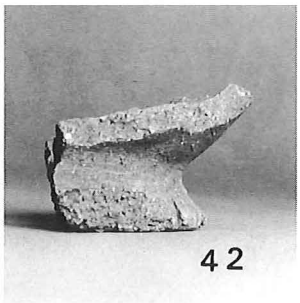


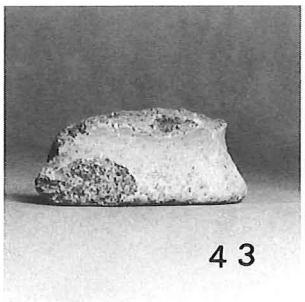
出土土器② 1／2

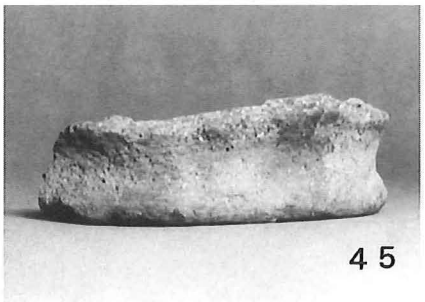


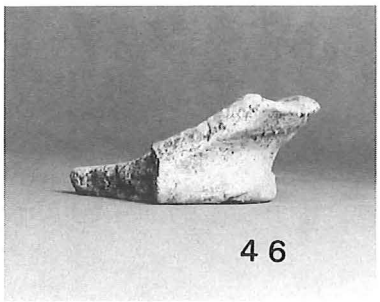


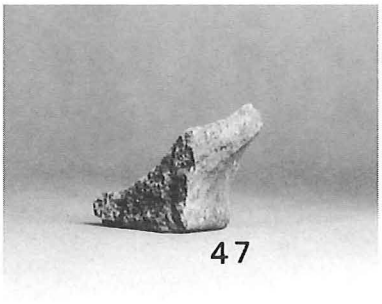


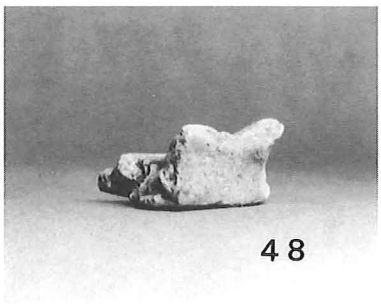




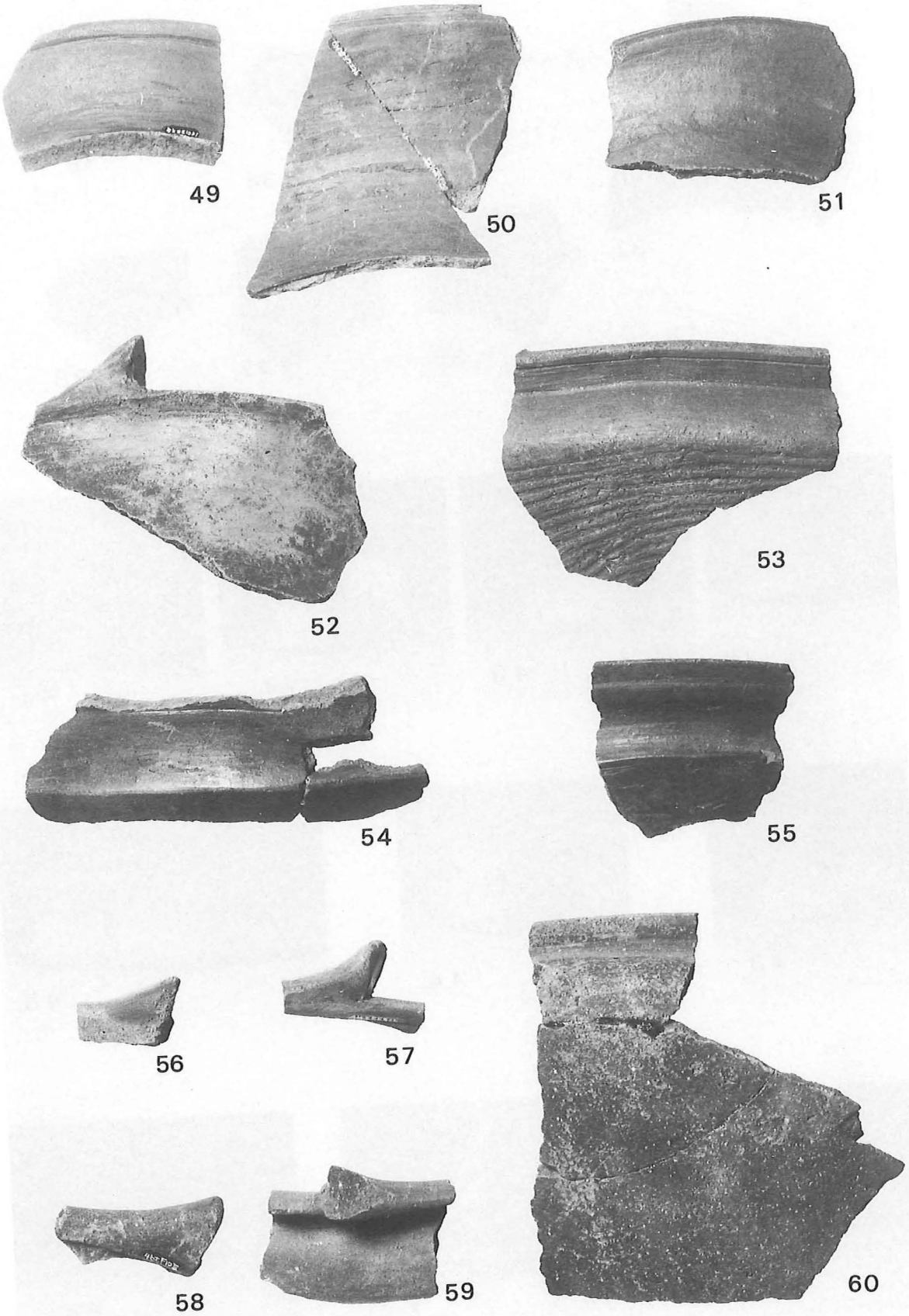




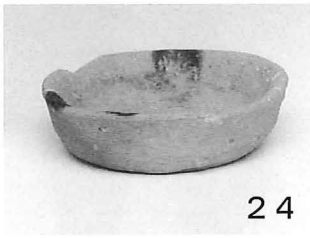




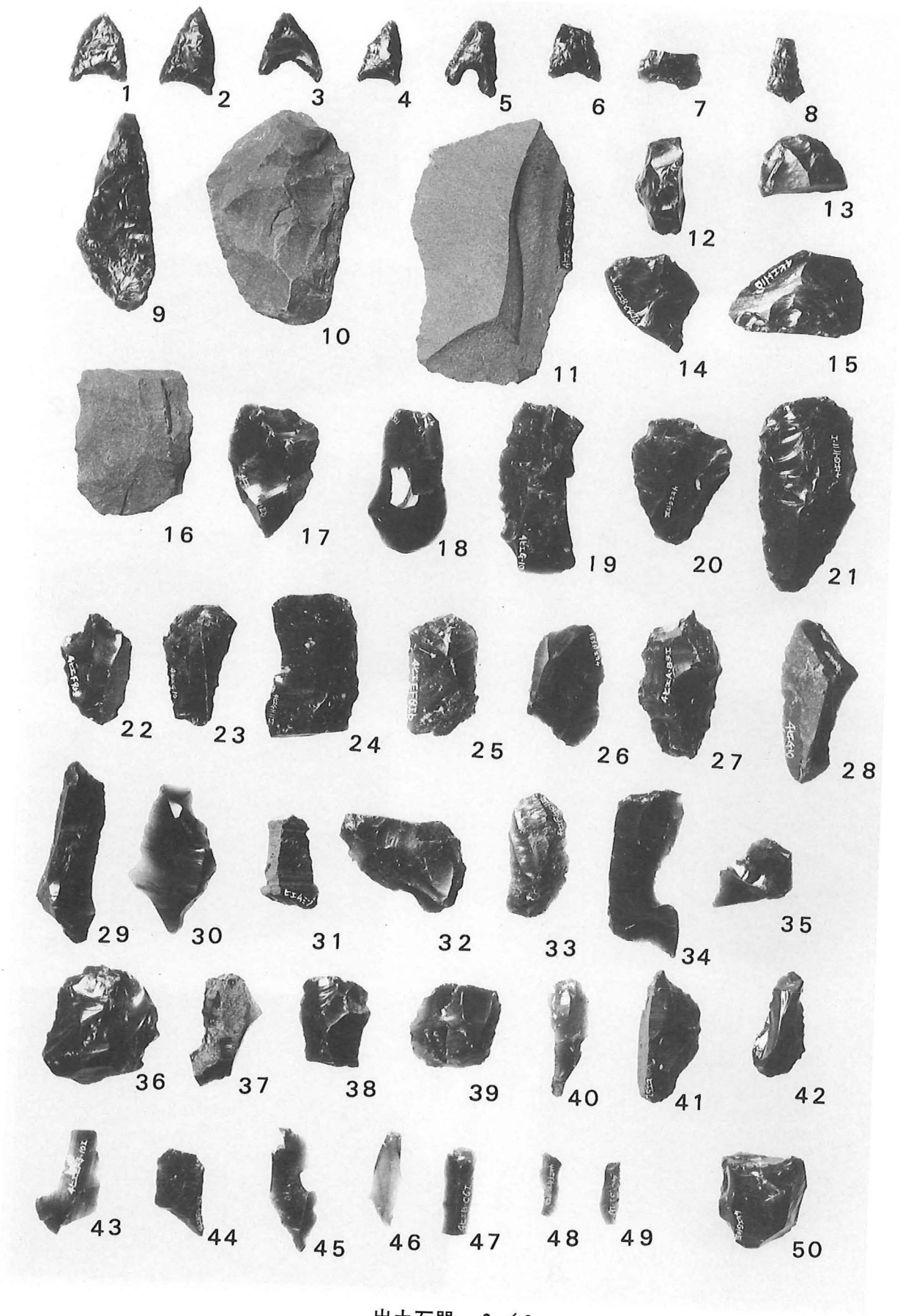
出土土器③　1／2



出土土器④　1／2



出土古式土師器及び古代・中世の土師器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

出土石器　2／3

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひえたばるいせき
書名	稗田原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第136集
編著者名	村川逸朗・福田一志・古門雅高
編集機関	長崎県教育庁文化課
所在地	長崎市江戸町2－13
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
稗田原遺跡 (ひえたばるいせき)	島原市稗田町 (しまばらしひえだちょう)	03	92－74	32°48′ 24″	130°21′ 10″	19920817～ 19920903 19931028～ 19931202 19951016～ 19951102	350m² (1次) 650m² (2次) (3次)	道路拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稗田原遺跡	生活跡	縄文時代 古墳時代 古代～中世 近世	竪穴式住居跡 掘立柱建物跡 溝，柱穴	縄文時代早・晩期土器，石鏃，スクレーパーピエス・エスキーユ，石核，磨製石斧，打製石斧，すり石，砥石，叩石，古式土師器，古代～中世の土師器等	

長崎県文化財調査報告書第136集

稗田原遺跡 I

1997

発行　長崎県教育委員会
印刷　株式会社 昭和堂印刷